

骨疽ハ稀ニ起ル處ニシテ概テ一局部ノ骨疽ヲ以テ普通ナ  
 リトス齒髓ハ失活スルモ白堊質ト齒根膜トノ關係ハ依然  
 トシテ存在シ又齒髓ハ生活スルモ白堊質ハ多少齒根膜ト  
 ノ連續ヲ喪失スルコトアルヘキナリ  
 全部ノ骨疽トナリタル齒牙ハ弛緩ヲ來シ脱落スヘシト雖  
 モ白堊質ノ一部骨疽ト成リタル齒牙ハ髓ノ存在如何ニ關  
 ラス痛苦ナク又炎衝ナク永ク其使用ニ耐ユルコトアルヘ  
 シ  
 齒髓壞疽ノ原因徴候及療法ハ彙ニ之ヲ詳説シタルカ故ニ  
 今爰ニ之ヲ贅セス  
 白堊質ノ骨疽ハ多ク齒根膜炎ニ原因スト雖モ時下シテハ  
 齦肉及齒槽ノ吸收ニ基クコトアリ殊ニ前齒ニシテ其位置  
 ナ轉移シ血管ノ連結ヲ分離スルカ如キ打擊ヲ蒙ルヨリ  
 起ルコトアリ

白堊質ノ骨疽ハ病症ノ輕重ニ由リ必ス結膿シ其膿ハ齦肉  
 ニ開口セル孔又ハ齒槽ヨリ齒根ノ周圍ニ滲出ス  
 骨疽トナリタル齒根ノ表面ハ粗鬆トナリ且變色ヲ來ス其  
 粗鬆トナルハ齒根膜ノ分離ト吸收トニ因ルモノニシテ若  
 シ齒根膜全ク分離セルトキハ齒根ニ沿フテ探針ヲ齒槽深  
 底ニ挿入スルヲ得ヘシ又骨疽トナリタル齒根ハ唾液ニ浸  
 サレ齒石附着シ易ク而シテ其齒石ハ全部ヲ被蔽シ又ハ小  
 結節ヲナシ通常堅硬ニシテ黑色ヲ帶ヘリ  
 白堊質骨疽ノ治法ハ拔牙ヲ施スニアリ然レトモ齒牙ノ尙  
 使用ニ耐ヘ且其苦痛ヲ治シ得ヘキトキハ勿論之カ保存法  
 ナ圖ヲサルヘカラス  
 成齒根ノ吸收……ハ通常慢性齒根膜炎及齒骨疽ニ隨伴  
 スルモノニシテ其患齒ヲ拔キ之ヲ驗スルニ此病ニ罹レル  
 齒根殊ニ其尖端ハ乳齒ノ根又ハ骨ノ吸收ヲ受クルトキト

同ク粗ク削剝セルヲ見ルヘシ而シテ許多ノ場合ニ於テハ成齒根ノ全部又ハ其大部分ヲ吸收スルコト極メテ稀ナリ蓋シ成齒ハ斯ノ如キ吸收ヲ受ルニ先クチ必ス脱落シテ存留スルコトナクレハナリ故ニ其病狀ノ進ムトキハ齒牙必ス動搖シテ其療法ハ唯拔牙スルニアルノミ

齒槽ノ吸收……………ハ往々特種ノ疾病ナリト斷言セラル、モ其原因ハ多クハ慢性齒根膜炎ニアリテ之ヲ治センニハ齒根膜炎ト同一ノ療法ヲ施スヘシ彼ノ中年ニシテ齒槽消耗ノ爲メ齒牙脱落スルコト恰モ老年者ノ自然ニ脱落ヲ來スト同一ノ觀アルカ如キ原因不明ナル齒槽吸收ノ場合ニモ亦唯此療法ヲ用フヘシ

第九章 眼肉及口内粘膜ノ疾病

眼肉脈衝……………ハ種々ノ原因ヨリ誘起スルモノニシテ或

ハ齒根膜炎ニ伴フコトアリ或ハ齒頸ノ周圍ニ堆積セル齒石ノ刺撃又ハ骨疽ニ罹ルル齒牙ヨリ起ルコトアリ又消化機ノ疾病殊ニ妊娠<sup>信</sup>瀉風病或ハ平常多量ノ亞爾個保兒ヲ用ユルヨリ誘起スルコトアリ梅毒モ亦其原因ノ一ニシテ漏唾症ノ如キハ其確徵ニシテ又慢性水銀中毒症ニ於テモ然リトス且ツ敗血病ノ如キ病症ヲ生スレハ血液不長トナリテ此疾患ヲ惹起スルコト甚ク多シ

脈衝ハ齒根ノ一小局部ニ限ラル、コトアリ又ハ各兩顎ノ全部ニ及ホスコトアリ一局部ノ脈衝ハ局部ノ刺撃ヨリ常ニ起ルヲ多シトシ全部一般ノ脈衝ハ全身ノ組織ニ不健全ヲ生セルヨリ起ルモノトス

徵候……………ハ眼肉深赤色又ハ紫色ヲ帶ヒ腫脹シテ海綿狀ヲ呈シ且ツ柔軟ニシテ感シ易ク僅微ノ刺撃ニ遇フモ出血シ易クシテ膿汗ハ眼肉ノ緣端齒牙ノ周圍ニ漏出スルヲ見

ルヘシ其症候永續スルトキハ延ヒテ齒根膜ニ波及シ齒牙  
 ナ弛緩シテ終ニハ齒槽ノ吸收ヲ生スヘク慢性脈衝ハ時ト  
 シテ眼肉肥大症ヲ誘起シ其異大ノ成長ハ初メ柔軟ナレト  
 モ後ニハ堅ク纖維狀ノ性質ヲ具有スルニ至ルヘシ  
 其療法ハ第一刺撃ノ根原ヲ除去スルニアリ而シテ局所刺  
 衝物タル齒石及弛緩齒又ハ骨疽ニ罹リタル齒ヲ速ニ除去  
 セサルヘカラス而シテ之ヲ治療センニハ眼肉ニ放血術ヲ  
 施シ且ツ急性ノ場合ニハ温蒸劑又慢性ノ場合ニハ單寧ノ  
 如キ收斂劑ヲ用ヒ臭氣アル膿汁アラハ瀉劑ヲ用ヒ齒頸部  
 ニハ鹽酸化亞鉛又ハ石炭酸ノ溶液ヲ以テ洗淨スヘシ若シ  
 其脈衝全身疾患ニ隨伴シタルモノナルトキハ局所治療ハ  
 其第二段トナシ須ラク一般全身ノ健康ヲ回復スルニ意ヲ  
 注カサルヘカラサルナリ  
 齦口瘡……ハ幼時ノ口腔ニ起ル處ノ脈衝ニシテ全粘膜

赤色ヲ帶ヒ諸所ニ水泡ヲ發シ殊ニ唇ノ内側及舌端ニ多シ  
 トス此水泡ハ發汗狀ヲ爲シテ發生シ破膜シテ暴露セシ其  
 下底ハ深赤色ヲ呈スルヲ見ルヘシ以上ノ徵候ヲ呈スルト  
 共ニ熱發シ又ハ下痢ヲ起スコトアリ其療法ハ一般全身ノ  
 健康ヲ回復スルヲ第一トシ局所ニハ偏里設林或ハ硼砂又  
 ハ蜂蜜ノ如キ洗劑ヲ用テハシ合劑ヲ用テ可シ  
 阿布答性潰瘍……ハ大人又ハ小兒ニモ起ルモノニシテ  
 齦口瘡様潰爛ナリ其初期ハ管ニ粘膜ノ脈衝ニ止マルト雖  
 モ漸ク進ンテ圓形ヲナセル透明ノ水泡ヲ發シ破レテ細小  
 ナル腫物トナリ赤色ヲ帶ヒテ腫脹縁ヲ有スルニ至ル此病  
 症及齦口瘡ノ或ル場合ニ於テハ顯微鏡的寄生物「オイヂム、  
 アルピカンス」ノ層ヲナシテ潰瘍ヲ被覆スルヲ見ルコトア  
 リ其療法ハ身体ノ健全ヲ回復スルヲ以テ第一トシ硫酸銅  
 又ハ硝酸銀ヲ以テ潰瘍瘡ヲ燒キ洗劑トシテ硫酸曹達一写

テ水一弓ニ溶解シ以テ寄生植物ヲ絶滅スヘシ  
 舌及唇ノ潰瘍……ハ屢ハ破壊セシ齒端及腐蝕セル齒牙  
 ノ接觸ヨリ生スルモノニシテ梅毒及食物不消化ノ如キ自  
 他ノ原因ヨリ起ルモノト等シク其刺撃ニ惱マサル、コ  
 ト往々ニシテ少ナカラズ齒牙粗造面ノ刺撃ヨリ來ル其潰  
 瘍ハ輕重アリテ蔓延スヘキモノナリ其形狀不規則ニシテ  
 稍堅ク中心ハ大抵患齒ニ對スル粘膜ノ表面又ハ舌ノ側面  
 及下面ニ多ク其潰瘍ヲ放置セハ皮癌ニ類似セル形狀トナ  
 リテ殊ニ顎下腺硬化ノ疾患ニヨリ最モ能ク酷似スルニ至  
 ルモノナリ  
 腐蝕セル齒牙ノ近傍ニ潰瘍ノ發生シタルトキハ其齒牙ノ  
 粗面ヲ鑷子ニテ能ク滑磨スヘシ若シ潰瘍ニシテ單純ナル  
 性質ヲ帶フルトキハ速ニ全癒シ得ヘシト雖モ尙之ヲ速治  
 セシメノニハ水一弓ニ硝酸銀二氏ヲ溶解セル如キ收斂性

石の銀の塩布です

ノ洗劑ヲ用ユヘシ  
 口中粘膜ニ潰瘍ヲ生スルハ梅毒性ニ於ケル最モ普通ナル  
 徵候ノ一ニシテ其形狀種々ナリト雖モ時トシテハ上述セ  
 ル自他ノ原因ヨリ來リタルモノト容易ク判別シ難キニト  
 アリ此場合ニ於テハ梅毒性自他ノ原因ヨリ之ヲ診斷セザ  
 ルヘカラス  
 口癌……ハ比較的稀有ノ病症ニシテ全ク下等人民ノ群  
 居セル所ニ住スル榮養不給ノ小兒ニ限ルモノトス此病症  
 ハ眼肉及頬ヲ腐蝕スル悪性潰瘍ニシテ其初期ハ粘膜ノ或  
 ル一部分ニ起ルト雖モ多クハ黄色又ハ灰色ヲ帶ヘル潰瘍  
 ノ形狀ヲ以テ中央前齒ノ頸部ニ近キ眼肉ノ縁端ニ現出シ  
 然ル後速ニ蔓延シテ頬ノ内側ニ及ホシ潰瘍ハ齒槽ノ方向  
 ニ擴張シ眼肉及齒根膜ヲ損傷シ終ニ骨及齒牙ノ骨疽ヲ生  
 スルニ至ル凡テ此疾患ノ及ホシタル部分ハ腐肉シテ柔カ

ク暗黒色ヲ帶ヘル大ナル粗狀ノ潰瘍アリテ類テ洞開穿通  
 スルニ至ルヘシ而シテ臭氣アル膿汁及唾液流出ハ此亢進  
 ニ伴フモノニシテ初期ニ於テハ僅微ノ疼痛或ハ全ク痛苦  
 ナク患者ハ衰弱シテ死亡スルコトアリ  
 療法ハ規尼涅、諸沒尼亞、武蘭泥等ノ如キ強壯劑ヲ用ヒテ其  
 榮養ヲ補ヒ局所ニハ硝酸又ハ酸性硝酸水銀ヲ用ヒテ其面  
 テ破壊シ癒創洗劑ヲ以テ滲出物ノ臭氣ヲ洗淨スヘシ

第十章 齒牙消耗及器械的剝脫

春秋漸ク進ムニ隨ヒ齒牙ハ咀嚼ノ爲ニ漸々摩耗セラル、  
 モノニシテ其初メハ珞瑯質ヲ剝脫シ次ニ象牙質ニ及フ若  
 シ此堅硬ナル組織ノ徐々破壊消耗スルニ當リ造齒細胞ノ  
 表皮化骨作用ヲ起サ、レハ齒髓ハ直チニ露出スルニ至ル  
 ハシ消耗ノ度ハ素ヨリ齒ノ密度、其用方、咀嚼ノ多少ニ關シ

テ差異アリ若シ咀嚼法ニシテ正シキトキハ上下前齒ノ消  
 耗スルコト少ナシト雖モ其齒端ト齒端ト相接スルトキハ  
 齦肉ト殆ント水平ニ至ル迄摩耗スルコトアリ又稀ニハ前  
 齒、臼齒ヨリ早ク消耗シテ終ニハ口ヲ閉ツルモ前齒ハ密接  
 セサルニ至ルコトアリ齒牙消耗ハ其亢進遲々トシテ敢テ  
 痛苦ヲ感スルコトナクレトモ往々象牙質曝露又ハ齒髓ノ  
 曝露セントスル傾向アルヨリ疼痛ヲ起スコトアリ  
 齒牙消耗症ノ療法ハ象牙質ノ感覺過敏性又齒髓ノ刺擗療  
 法ノ章ニ於テ説明シタルモノト同シ  
 齒ノ唇面ニ横溝狀ヲ爲シ又ハ裂孔ヲ生セルモノアルハ多  
 ク硬キニ過クル齒刷子又ハ多量ノ砂ヲ含メル齒磨粉ヲ用  
 エルニ歸因スルモノニシテ此等ノ横溝及裂孔ハ其摩擦ヨ  
 リ起ルカ故ニ齒ノ外表面ニ多シ其曝露セル面ハ時トシテ  
 非常ノ受感性ヲ發スルコトアリ其療法ハ消耗ノ場合ニ同

シト雖モ若シ其溝狀大ニシテ深キトキハ之ヲ切開シテ適宜ノ形狀ト成シ支持スヘキ點ヲ作リテ永久充填ヲ施スヲ可ナリトス

齒牙ノ挫傷……ハ毆打或ハ食物咀嚼ノ際ニ當リ骨片、砂礫等ノ爲ニ起ルコトアリ若シ其挫傷セラレタル部分齒髓腔ニ達セサルモノハ之ヲ鑿磨シテ平滑ナラシメテハ以テ足レリト雖モ若シ窩孔ヲ形成セルトキハ是ニ充填スヘク又其傷害齒髓腔ニ達シ裂痕齒根ニ波及セルモノハ除去セサル可カラス然レトモ齒冠ノ一局部ニ止マルトキハ可成的齒ヲ保存スルノ治術ヲ行ヒ先ツ齒髓ヲ除キ去リテ充填術ヲ施シ若シ前齒、犬齒ナレハ人工齒冠ヲ用ヒテ其咀嚼ヲ助ケシムヘシ

齒牙ノ轉位……ハ多ク前齒ニアリ打撲ヨリ起ルモノニシテ時トシテハ齒槽ヨリ全ク脫出スルアリ又一部分轉位

シ或ハ全部轉位スルコトアリ

療法……ハ若シ一部分轉位シタルモノハ齒槽ニ押シ戻スヘシ又全ク轉位脫臼シタルトキハ數時間内ニ再ヒ之ヲ齒槽ニ植置スヘシ其法最初注射器ヲ以テ温水ヲ注キ齒槽中ヲ洗滌シ凝結セル血塊ヲ除キ齒ヲ洗淨シテ齒槽中ニ挿入シ紐ヲ以テ是ヲ保持スルトキハ其部位ニ固定シ數年ノ久シキニ耐フヘシ然レトモ此等ノ療法ヲ施ス場合ニ於テハ急性齒根膜炎ヲ起スコトナシトセス然ルトキハ既ニ詳述セル療法ヲ適用スヘシ

### 第十一章 齒石

唾液ノ成分中ニ含有セル土質鹽類ハ齒石トナリテ齒牙ニ附着スルモノニシテ縱令健康ナル者ト雖モ數月放置スルトキハ必ス其附着ヲ免カンス殊ニ身軀ニ異常アルトキハ

齒石ノ構成ヲ助ク其堆積スルコト一層迅速ナリ  
 消化機能ノ不長ニ隨伴スル疾病ニ罹ル者又ハ口中ノ分  
 泌機能盛ナルモノハ齒石ヲ構成スルノ傾アリ齒石ハ咀嚼  
 ノ摩擦ニ觸レサル齒面ニ附着スルモノニシテ片側ノミヲ  
 用ヒテ咀嚼ヲナストキハ他ノ一側ニ附着シ易ク其附着厚  
 積スルトキハ齒槽ノ吸收ヲ發スルコトアリ凡テ齒石ハ唾  
 腺開口ノ近傍即チ上顎白齒ノ頰面、下顎前齒ノ舌面トニ堆  
 積スルヲ常ナリトス

齒石ノ密度及其色ハ種々ニシテ速カニ附着セルモノハ其  
 質軟弱ニシテ薄黄色ヲ帶ヒ附着遅キモノハ硬固ニシテ其  
 色黒ク或ハ褐色、青色又ハ眞黑色ノモノアリ

齒石ノ成分及分析表ヲ左ニ示ス

磷酸土質	七九、〇	唾液苔粘液	一二、五
唾液素	一、〇	動物質	七、五

トームス氏ノ説ニ從ヘハ齒石ハ其附着スル位置ニ依リ其  
 化學的成分ニ差異アルカ如シ則チステラノ氏管ニ近キ處  
 ニアルモノハ炭酸石灰ノ多量ヲ含ミ下前齒ニ附着セルモ  
 ノハ磷酸石灰ニ富メリ

顯微鏡下ニ照檢セハ齒石ノ構成中動物質ハ主ニ上皮ニシ  
 テ其中ニ「レプトズリキス」(微菌)纖維ノ存在ヲ見ルコトヲ得  
 ヘシ

小兒ノ齒牙ニ一種青帶黑色ヲ帶ヒ殊ニ前齒ノ對唇面ニ於  
 テ其甚シキハ是恐ラクナスマイズ氏膜(珐瑯膜)ノ汚染セラ  
 ル、ト「レプトズリキス」ノ附着ニ依ルナラン

齒石ノ附着ハ屢ハ齦肉ノ遊離端ニ於ケル齒頸ニ始マリ齦  
 肉及齒根膜ノ慢性脈衝ヲ起シ齦肉及齒槽吸收ノ一原因ト  
 ナルハ其類例枚舉ニ違マアラサルナリ

療法………齒刷子ヲ注意シテ用フルカ又ハ咀嚼ヲ瀟繁ニ

スルトキハ齒石ノ附着ヲ遲緩ナラシメ或ハ之ヲ防止スヘ  
 シト雖モ其堆積甚シキトキハ到底之ヲ防ク能ハスルト  
 キハ適宜ノ除去器械ヲ用ヒサルヘカラス此手術ヲ施スニ  
 ハ器械ノ刃ヲ齧肉緣端ニアル齒石ノ下底ニ入レテ剝キ取  
 ルヘシ斯クスレバ鱗狀層ヲナシテ片々剝離シ瑛瑛質ノ滑  
 面ヲ露出スヘシ齒間ノ齒石ヲ去ルニハ扁平ノ刃ヲ有スル  
 器械ヲ用フ又其硬クシテ強ク附着スルモノハ漸次ニ之ヲ  
 剝離スルヲ可トス又小兒ニ於テ見ル所ノ變色ハ水ト浮石  
 末ヲ木端等ニ附着シテ之ヲ磨キ去ルヘシ  
 齒石ヲ剝キ去リタル場合ニ於テハ瑛瑛質ノ面ヲシテ平滑  
 ナラシムルヲ要ス若シ粗面ノ儘放置スルトキハ再ヒ齒石  
 ノ附着ヲ來スコト速カナレハナリ故ニ最後ニ沈澱白堊及  
 石板石等ヲ用テ其面ヲ平滑ニ琢磨スヘシ

第十二章 齒牙ニ隨伴スル病的發生

「オドントーイム」……ハ最近齒組織ノ錯雜ニ起因スル惡形  
 齒、畸形齒及癒又腫瘍ノ諸症ヲ包含シタル名稱ニシテ此等  
 ノ病源ハ未ダ詳カナラスト雖モ齒ノ發育スル際ニ起ルモ  
 ノナリトハ最モ信ニ近キカ如シ蓋シ此時期ニ於ケル齒ハ  
 吾人ノ常ニ目撃スルカ如ク軟組織ヨリ成リ漸々機關ヲ構  
 造シテ遂ニ化骨スルモノナルカ故ニ其機關構成ヲ爲スヘ  
 キ原質ノ發育セントスルヤ動モスレハ病的變化ヲ受ケテ  
 滋養過多肥大症、滋養欠乏萎縮症等トナリテ後其化骨作用  
 ヲ營ム其病症ハ瑛瑛質機關或ハ齒髓乃至齒牙ノ全組織ニ  
 於テ起ルコトアリテ敢テ一定セサルモ其最モ單純ナルモ  
 ノハ疣齒ト稱スルモノ是ナリ疣齒ハ齒ノ表面ヨリ塊又ハ  
 瘤ノ突起セルモノニシテ多クハ齧肉ノ下、齒頭ノ近傍ニ生



シ相重ナリテ殆ント過剩齒萌出ノ觀ヲナスモノアリ之ヲ  
 截斷スルニ珫瑯質ニ蔽ハレタル象牙質ヨリ成リ時トシテ  
 ハ連絡セル齒髓ヲ有シ其根ハ完全ナル形狀ヲナスモノア  
 レトモ數齒齒冠ニ存スルトキハ通常其根短カクシテ其形  
 狀不正ナリ是レ齒冠ノ肥大症ニ因リ根ノ發育ヲ妨ケラン  
 タルニ由ルモノナラン  
 又時トシテハ齒冠通常ナルモ其根ハ不正ニシテ多孔質ナ  
 ル象牙質ト骨組織(白堊質)ノ錯雜混合シタル塊ヨリ成リ脉  
 管ヲ有スルコトアリ是レ齒髓ノ肥大症トナリタルモノナ  
 リ  
 「オドントーム」ノ他種類ニ在リテハ無構造ナル齒組織ヨリ  
 成リ一定ノ形狀ナキ塊ヲナシ殆ント齒ト相似サルモノア  
 リ通常其位置ニ生スル齒ヨリ小ナリト雖モ又時トシテハ  
 著シク大ナルコトアリ

或種類ニ在リテハ其原因同シキモ主ニ纖維狀ヲ有シ化灰  
 シタル小結節及不充分ニ發育シタル齒組織ヨリ成ルモノ  
 アリ斯ノ如キ瘡ハ通常囊ヲ以テ被包セラレ脈衝ノ爲ニ接  
 續スルニアラサレハ隣接組織ト癒着スルコトナシ  
 「オドントーム」ハ必スシモ脈衝又ハ刺劇ヲ發スルモノニア  
 ラス之ニ反シ其病的變化齒根ノミニ限レルモノハ數年間  
 齒ヲ原形ノ儘ニ保存シ且之ヲシテ依然齒牙タルノ作用ヲ  
 爲サシム然レトモ一朝其醜形ヲ呈スルヤ忽チ刺劇ノ根原  
 トナリ又ハ脈衝ノ中心トナルヘキカ故ニ宜シク之ヲ除去  
 セサルヘカラス而シテ其齒ヲ除去スルニハ普通ノ拔牙鉗  
 子ヲ以テスルモ素ヨリ充分ナリ然レトモ其手術ヲ容易ナ  
 ラシメシカ爲メ骨鉗子ヲ以テ骨ヲ分離スルコトアリ纖維  
 狀「オドントーム」ニ於テモ其療法大同小異ニシテ先ツ囊ヲ  
 切開シ刀柄ヲ以テ其塊ヲ裏反スヘシ顎骨ニ生スル瘡ニシ

テ其何タルヤヲ識別スルニ苦シムトキハ先ツ口中ヨリ試  
 截斷ヲ施シ以テ其病症ヲ明ラカニシタル後ナラテハ猥リ  
 ニ頤ヲ截斷スヘカラス故ニ「オドントーム」ヲ除カントスル  
 ニ當リテモ深ク茲ニ注意シテ其發生ノ性質ヲ識認シタル  
 後ニアラサレハ容易ニ果斷ナル治術ヲ施スコトナカレ  
 第五十二圖ハサルター氏ノ著書(七)ヨリ拔萃セルモノニシ  
 テ「オドントーム」ノ截斷面ヲ示スモノナリ又第五十三圖ハ  
 其實際ノ大サヲ示スモノニシテ齒冠ハ普通ノ形狀ヲナス  
 ト雖モ其根ハ齒ノ大サノ二倍以上ニ達シ外層ハ白堊質内  
 部ハ象牙質ヨリ成リ中心ハ齒髓ト同一ノ精巧ナル脉管組  
 織ヲ以テ圍繞セラレタル骨組織及象牙質組織ノ混塊ヨリ  
 成ル

第五十四圖ハサルター氏「リメック」ニ於テ男子ノ上顎ヨ  
 リ拔去シタル「オドントーム」ノ實形ヲ示セルモノニシテ此

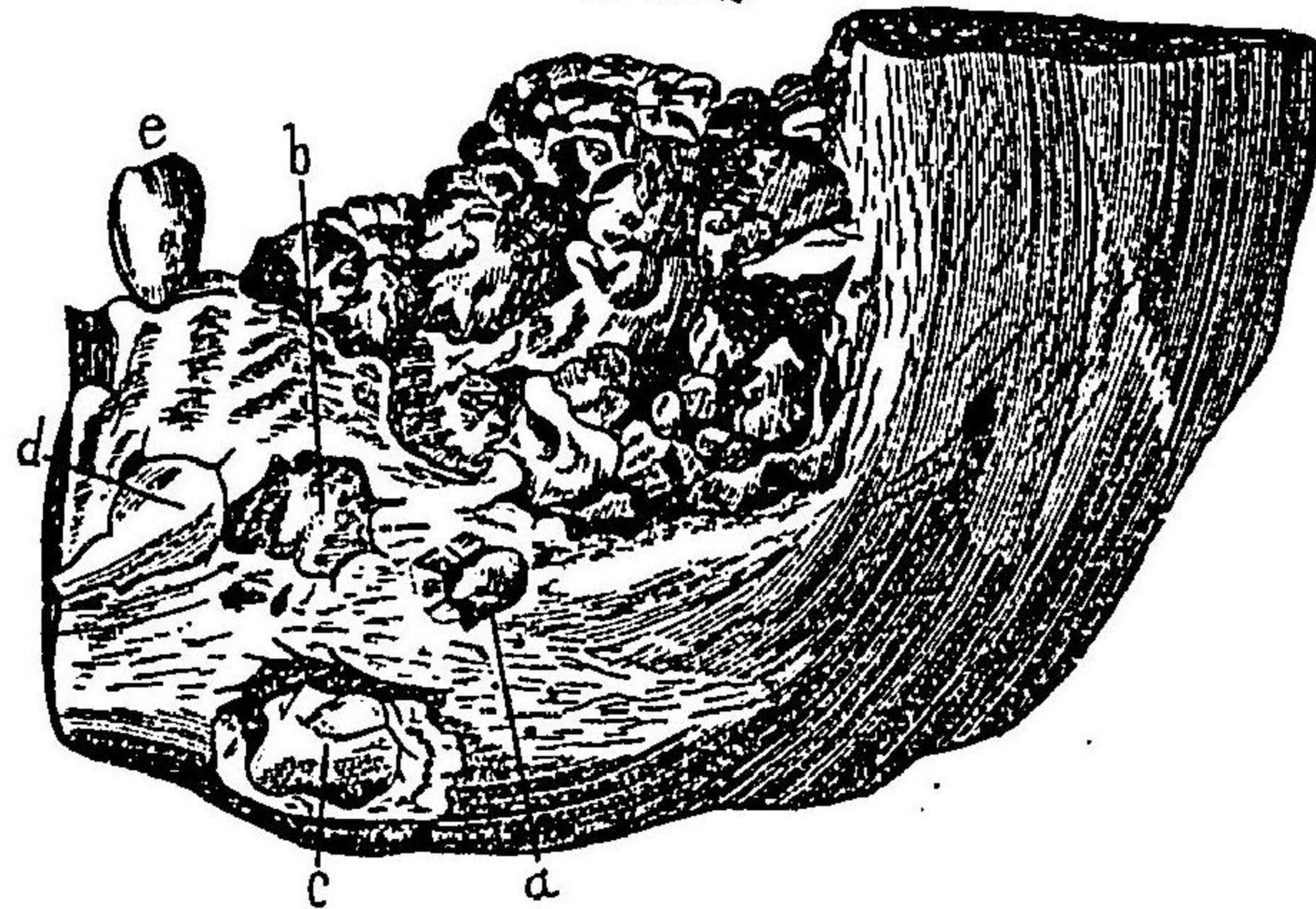
圖三十五第



圖四十五第



圖五十五第



「オドントローム」ハ「アントローム」ニ生シ疼痛永續シテ膿ヲ醸シ  
遂ニ管狀孔ヲ生シ頰部ニ孔口ヲ生スルニ至ルモノナリ其  
組織ハ前項説ケルモノト相等シ  
第五十五圖ハヒース氏ノ著書ヨリ出セル下顎ノ左方ニ於  
テ生シタル「オドントローム」ニシテ以下陳述スル所ハ此瘻ニ  
關シテ同氏カ公ケニシタル説明ノ要旨ナリ  
患者ハ年齡二十歳ノ男子ニシテ五歳ノ時ヨリ下顎ノ疾病  
ニ罹レルモノナリ其口腔ヲ驗スルニ堅硬ニシテ其表面圓  
滑ナル瘻、下顎左側ノ全部ヲ占メ唯第一小白齒ノ發生セル  
ヲ見ルノミナリ圖ニ示セル上顎ノ一部ハ主治醫フホーグット  
氏ノ截斷シタルモノニシテ之ヲ精査セシニ第一小白齒  
ト顎枝ノ間ハ全ク變シテ窩孔トナリ處々ニ卵大ニシテ堅  
硬ナル節狀瘻塊アリ其表面ハ珫瑯質層ノ爲ニ圍繞セラレ  
、處ノ夥多ノ小節瘤ヲ以テ蔽ハレ之ヲ截斷シ顯微鏡下ニ

照ラシテ試験セシニ瘡ノ表面ニハ珙瑯質アリテ内部ハ象牙質ヲ以テ充クサレ窩孔中ニ侵入シ其下底及他ノ部分ハ白堊質ヨリ成レルコトヲ發見シタリ而シテ之ヲ圍繞セル骨囊ト瘡トノ間ニハ纖維狀組織ノ厚キ膜アリフホーゲット氏ハ此「オドントーム」ヲ以テ滋養過多肥大症ノ孰レカニ原因シタルモノト認定セリ

當時此ノ如キ瘡ハ如何ニシテ成長シタルヤ其理由未タ明亮ナラサリシヲ以テ上述ノ如ク唯顎骨ノ一部ヲ截斷スルニ止マリ瘡ノミヲ截リ取リテ之ヲ全治スルノ療法ヲ施シ以テ其經過如何ヲ見ル能ハサリシハ今日ニ於テ最モ遺憾トスル處ナリ

圖中a及bハ顎骨ヨリ外部ニ瘡ノ突出シタル部分cハ瘡ヲ蔽ヘル顎骨ノ一部ヲ截リ去リタル部分ニシテ其中ニ轉倒シテ發生セルモノハ臼齒ナリdハ第一小白齒eノ下ニ

壓迫セラレタル第二小白齒ヲ示セルモノナリ

顎囊ハ其構造甚々單一ニシテ齒ヲ包含セサルコトアリ或ハ一二ノ發育未全ナル齒牙若クハ完全齒ノ二三ヲ保有スルコトアリ此囊ハ上下兩顎中其孰レヲ問ハス發生スルモノナリト雖モ常ニ顎骨ノ後部ニ生シ老者ヨリモ幼者ニ於テ最モ多ク見ル處ノ病症ナリ

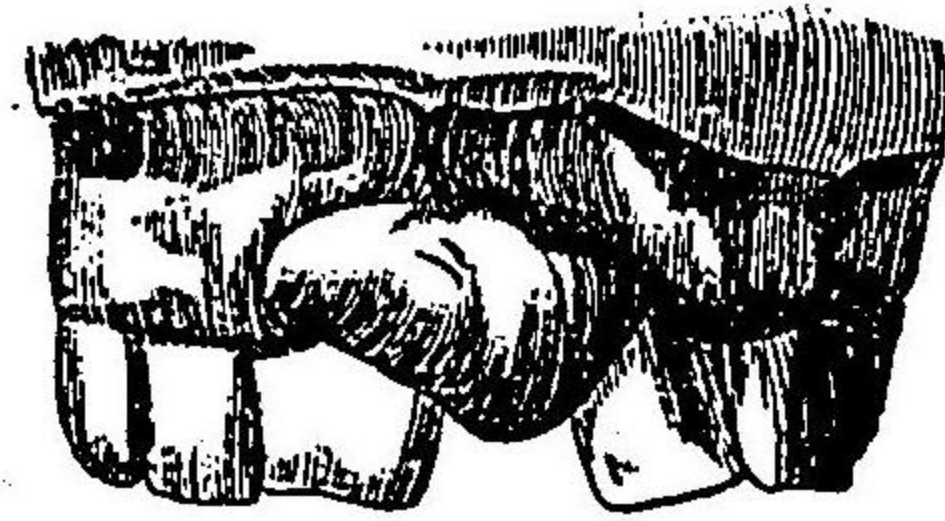
顎囊ハ疼痛ナクシテ漸次骨ノ成長スル症患ニシテ時日ヲ經ルニ隨ヒ非常ノ大サトナリ時トシテハ脈衝ヲ生シ又ハ絲膜スルコトアリ手指ヲ以テ之ヲ打撃スルトキハ其膨大セル壁ハ壓迫セラレテ堅硬ナル羊皮紙様ノ音響ヲ發ス時トシテハ甚々堅硬ニシテ固體ノ如キ音響ヲ發スルコトアリ其瘡ヲ刺ストキハ稀薄ナル液ヲ漏出ス其單囊ナルト合齒囊ナルトニ拘ハラズ其病源及徵候ハ共ニ相等シキカ故ニ切開術ヲ施スニアラサレハ其何レニ屬スルヤヲ辨別ス

ルコト能ハス然ントモ合齒囊ハ幼兒第二齒牙發育ノ際ニ起ルモノニシテ若シ齒牙ノ既ニ發生スヘキ時期ヲ經テ尙ホ其定位置ニ萌出セサルトキハ即チ其合齒囊タルコトヲ識別シ得ヘシ此ノ如キ囊ハ普通永久齒ト連結スレトモ又乳齒若クハ過剩齒ヲ含ムコトアリ囊中ニハ一齒ヲ含ムコト多キモ時トシテ數多ノ過剩齒ヲ一囊中ニ發見スルコトナキニアラス亦其囊ハ單一窩孔ナルコトアリ或ハ骨又ハ纖維ノ壁腔ニヨリテ數窩孔ニ區分セラレ、コトアリ單囊ノ病源ハ未タ明カナラサントモ齒牙病患ヨリ起ルモノアルハ疑フヘカラス其結膿スル所以ノ如キハ前章齒槽膿腫ヲ述フルニ當リテ間腫脹シ集合シタル膿汁ヲ含ムコトアルヲ説キシカ故ニ顎囊モ亦如何ニシテ斯ク多量ノ稀薄ナル液ヲ分泌シ遂ニ結膿スルニ至ルカヲ推知スルニ足ラ

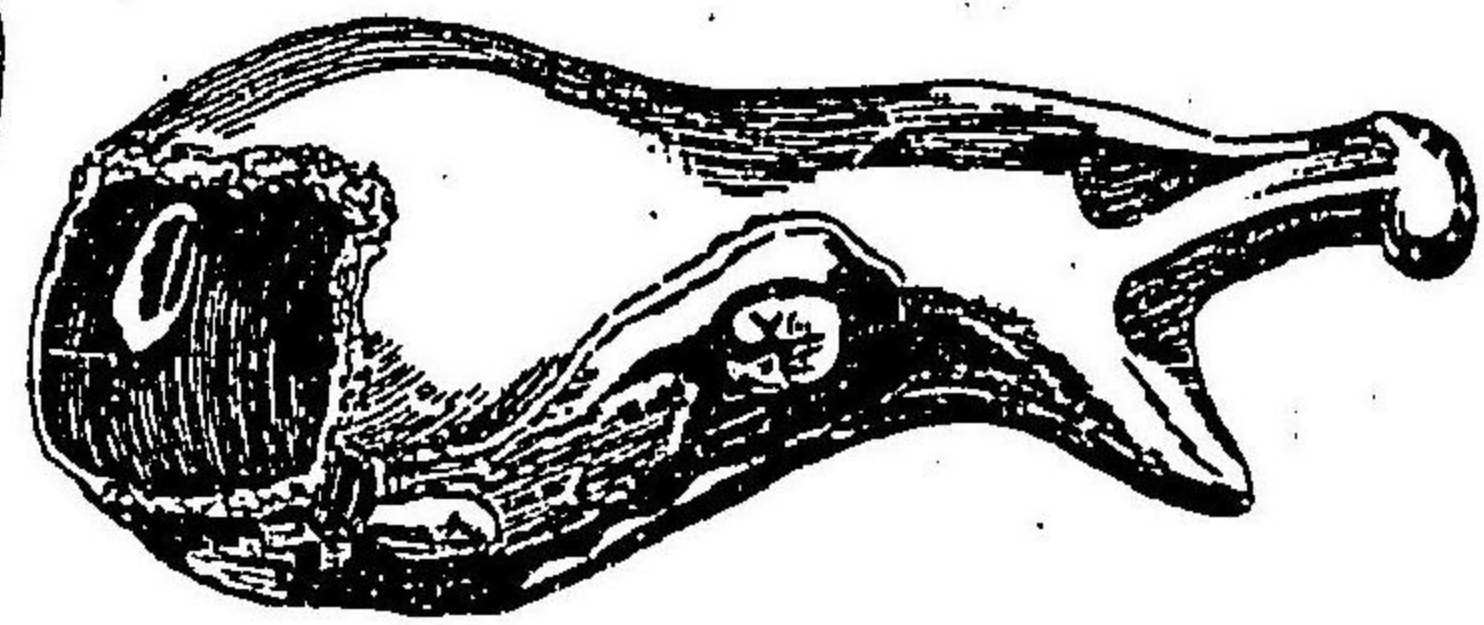
合齒囊ノ病源ハ明亮ニシテ始メ齒牙ノ發育セントスルニ當リ其發生中全ク骨囊ノ圍繞スルニ會ヒ爲ニ萌生スルコト能ハス是ニ於テカ汁液漸次窩孔内ニ滲出シテ骨壁ヲ擴張シ遂ニ瘤ヲ生スルニ至ルモノナリト、ムス氏ノ説ニ曰ク齒冠ノ全ク發育シタルトキハ珐瑯質ト之ヲ圍繞スル軟膜トノ間ニ少許ノ液貯アルヲ見ル若シ此液貯ニシテ其分泌量過多ナルトキハ相集リテ遂ニ骨ノ擴張ヲ惹起スルニ至ルヘシト顎囊ノ療法ハ之ヲ截開シテ内部ニ包有セル齒牙ヲ除去シ綿撒糸ヲ以テ窩孔ヲ塞キ其結膿ヲ止メ分泌面ヲ破壊スヘシ而シテ其截斷ハ成ルヘク口腔中ヨリ之ヲ行ヒ容貌ヲ毀損セサル様注意セサルヘカラス次ニ述フル所ハヒ、ス氏ノ著書ヨリ拔萃セルモノニシテ普通合齒囊ノ亢進ヲ説明シ併セテ顎瘤ノ疑フヘキ病症ハ

手術ヲ施ス前ニ試驗截斷ヲ爲スノ必要アルコトヲ知ラシ  
 ムルニ足ラン  
 第五十六圖ニ示ス處ノ顎囊ハ下顎骨ニ生シタルモノニシ  
 テ他ノ瘤ト異ナリ顎骨全軀ノ擴張ヲ來セルヲ以テ始メ下  
 顎ノ瘤ナリト診斷セラレタルモノニシテ患者ハ十三歳ノ  
 女子ナリ瘤ハ大ニシテ堅ク下顎ノ左側ヲ占メ六ヶ月以來  
 成長シタルモノニシテ其而ニハ開孔ヲキモ絶ヘス思ムヘ  
 キ排泄ヲナセリ主治醫ハ連骨ヨリ關節ニ掛クテ顎骨ノ左  
 半ヲ截リ除キ瘤ヲ截開シタルニ臭氣紛々多量ノ膿汁ヲ出  
 シタルカ故ニ茲ニ始メテ此瘤ハ顎ニ於ケル二骨板ノ擴張  
 ヨリ起レル顎囊ナルコトヲ知レリ窩中ハ厚キ管狀膜ヲ以  
 テ圍繞セラレ其下底ニハ犬齒窩壁外ニ突出セリ故ニ其病  
 源ハ犬齒ノ發育セサル爲メ其成分或ル原因ヨリ結膿シタ  
 ルニ起因スルモノナルヤ明カナリ

圖七十五第



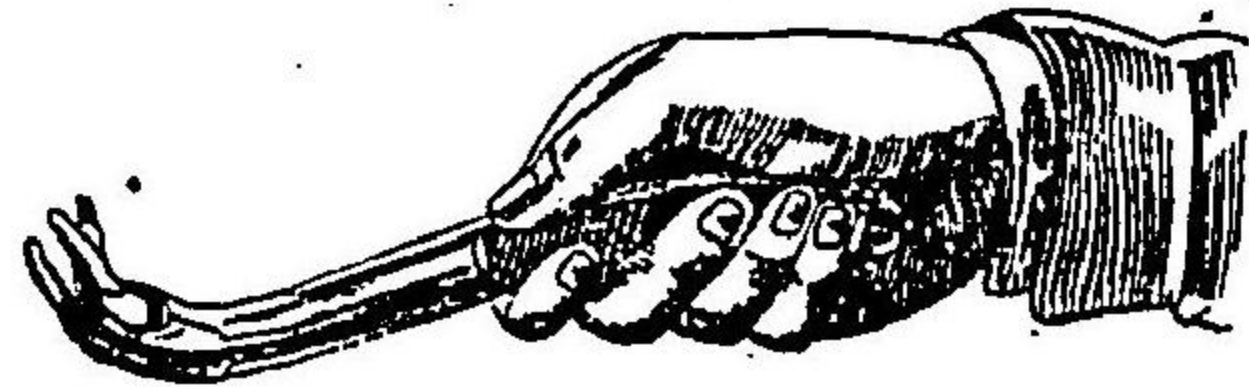
圖六十五第



圖九十五第



圖八十五第



齒齦息肉ハ顎骨ノ骨膜ヨリ突起スルカ或ハ之ニ附着セル  
纖維狀瘤ニシテ通常齒間ニ生シ漸々次齒ヲ押出シテ弛緩  
セシムルモノナリ然レトモ時トシテ齒牙ト相隔リタル骨  
ニ生スルコトナキニアラス此疾患ハ病狀甚ク緩慢ニシテ  
痛苦ナク粘膜ニ包マレタル硬キ球狀又ハ耳球狀ヲナシ成  
長スルモノニシテ其尤モ簡單ナル形狀ハ第五十七圖ニ示  
セルモノ是ナリ時トシテハ其容積甚ク大ニシテ鼻孔又ハ  
眼窩腔ヲ壓シテ醜貌ヲ呈セシムルモノアリ其後期ニ於テ  
ハ結膜シテ出血スルコトアリ其甚シキ者ニ至ツテハ往々  
生命ニ關スルコトアリ其病因ハ齶齒ノ刺衝又ハ拔齒ノ時  
齒槽ヲ傷碎スルヨリ起ルモノナリ然レトモ其症候ニ因テ  
ハ此等原因ニ歸スヘカラサルモノ亦甚多シ其療法ハ瘤ト  
共ニ突出セル顎骨ノ一部ヲ截去スヘシ然ラザレハ動モス  
レハ再發スルノ恐アリ

骨瘤ハ顎骨ニ生スル培生骨瘤ニシテ屢ハ吾人ノ遭遇スル所ナリ普通此瘤ノ生スル位置ハ下顎骨ノ内側ニシテ球狀ヲナシ其表面滑カニシテ極メテ堅硬ナリ時トシテハ下顎ノ隅角上顎空竇ノ近傍或ハ上顎ノ一部ニ生スルコトアリ其成長ハ緩慢ニシテ痛苦ナク敢テ不便ヲ感セシメス其原因ハ未タ明晰ナラスト雖モ稀ニ齒ヨリ蔓延セル永續ノ刺衝ニ随伴スルコトアリ然レトモ軟骨組織ノ發育シテ化骨作用ヲナシテ斯ノ如キ形狀ノ瘤ト變セシモノナルハ亦疑フヘカラス

療法……ハ瘤ヲ截斷スルニアリト雖モ此瘤アルカ爲ニ容貌醜惡ナルカ又ハ不便ヲ感セシムルニアラサレハ猥リニ截斷スヘカラス

第十三章 上顎竇ノ疾病

上顎竇ノ脈衝ハ稀ニ生スルモノニシテ其原因ハ他物舂ノ傷害若クハ存在ヨリ起ルモノトス例セハ一齒牙ヲ拔去スルニ當リ其根カ窩中ニ存在スルカ如キ場合ニ於テハ上顎竇ノ脈衝ヲ惹起スヘシ然リト雖モ主トシテ大白齒及小白齒ノ齒根カ窩底ニ存在スルカ如ク破壊齒ノ刺劇ニ基因スルコト多シ其徵候ハ鋭キ痛苦アリテ多少ノ發熱ト共ニ頰ニ腫脹ヲ生ス症候尙ホ増進スルトキハ痛苦一層烈シク鼻及前竇ニ擴カリ皮膚上ニ囉斯性(Frysipelalous)ノ紅色ヲ呈シ眼肉ハ赤ク海綿狀ニ腫脹シ時トシテハ其患部側面ノ鼻孔ヨリ膿汁ヲ滲出スルコトアリ其結膿スルヤ患部堅硬トナリ膿汁ノ出口アレハ疼痛其他ノ徵候ハ頓ニ靜止スヘシ然リト雖モ若シ膿汁ノ排泄口ナキトキハ病勢愈ヨ猖獗ヲ極メ竇壁ハ擴張シテ隣接セル孔中ニ侵入シ眼窩ヲ壓シ眼球ヲ壓出シテ淚道ヲ閉チ鼻孔ヲ鎖スニ至ルヘシ



上顎空竇ノ脈衝劇烈ナラサルモノハ骨膜炎ニ類似シ其脈衝只窩孔ニ接觸シタル膜ノミニ限ルコトアリ

其療法ハ窩孔ヲ截開シ温湯ヲ注射シ以テ外物ヲ取除クニアリ其病根ト認ムヘキモノハ縱令齒根ニ或ハ之ニ近接セル破壊齒アラハ勉メテ之ヲ拔除セサルヘカラス又齒槽ヲ侵シ結膿ヲ生シタル場合ニ於テハ直チニ拔牙スヘク空竇ノ膿汁ヲ排出スヘキ途ナキカ爲メ腫脹シテ止マサルトキハ齒槽ノ頂骨ヲ通シテ套管針ヲ挿入スルカ又ハ窩孔ノ外壁ニ沿フテ開口スヘシ此手術ヲ行ヒタル後ハ温蒸劑ヲ用ヒ温湯ヲ窩孔内ニ注入シ若シ急性ノ病勢減却スルモ排泄物ノ止マサルトキハ硝酸銀又ハ鹽化亞鉛ヲ窩孔中ニ注射セサルヘカラス

水腫病空竇ノ或ル原因ヨリ自然的膿汁ノ排出ヲ妨碍セラ

ル、トキハ液體集合シ漸々窩壁ヲ擴張セシメ著シキ醜形

ヲ來スコトアリ此病ハ其進行緩慢ニシテ痛苦ナキカ故ニ疑ハシキトキハ探針ヲ以テ刺穿スルカ又ハ截斷シテ試驗セサルヘカラス

其療法ハ上ニ述ヘタル方法ヲ以テ液體ヲ自由ニ注射セシメタル後屢ハ鹽化亞鉛(水一㊦ニ三氏)硝酸銀(水一㊦ニ一氏)或ハ沃度丁幾(水一㊦ニ一㊦)ノ洗劑ヲ空洞ニ注射スヘシ

空竇ハ時トシテ合齒囊狀纖維其他瘤ノ生スル位置タルコトアリ而シテ是等瘤ノ何物タルヤハ既ニ前章顎骨ノ病的成長物ヲ論スル章ニ於テ述ヘタルカ故ニ茲ニ之ヲ贅セス

第十四章 繼齒法

齒冠若シ傷害又ハ疾病ノ爲メ其一部若クハ全部破壊シタルトキハ髓腔ニ木釘又ハ樞軸ヲ固着シ以テ自然ノ齒根ニ人工齒冠ヲ附着セシムルコトアリ此手術ハ素ヨリ齒髓ヲ

抜キ去リタル後ニ施スモノニシテ前齒及犬齒ニ尤モ多ク  
 適用スト雖モ時ニ小白齒ニモ又此手術ヲ施スコトアリ  
 繼齒ヲ爲スニハ其齒根健全ナルモノニアラサレハ不可ナ  
 リ故ニ齒根膜炎現存スルトキハ須ラク之カ療法ヲ行ヒ繼  
 令其徵候ナキモ繼齒ヲナスニ先ク數日間髓腔ニ石炭酸  
 ヲ注入シ其豫防ヲナスヘシ然ラサレハ手術後ニ於テ往々  
 急性齒根膜炎ヲ起スコトアルヲ免カニス繼齒ノ準備ヲ爲  
 スニ當リテ齒冠ノ殘部ハ小鋸、鉗子及適宜ノ鑷子ヲ以テ之  
 ヲ截リ去リ齒根ノ緣端ヲシテ齧肉ト水平ニ其表面ヲ凹形  
 ナラシメ管腔ノ深サハ探針ヲ以テ之ヲ探リ其頂上ニ至ル  
 迄口徑ヲ等シクスルヲ要ス尤モ口徑ハ普通樞軸用ノ針ノ  
 太サタルヘシト雖モ破壞ノ爲メ尙ホ一層太クスルヲ要ス  
 ルコトナキニアラス此場合ニ於テハ軟組織ヲ截リ去リ窩  
 孔ノ壁ヲ滑カニシ以テ管ヲシテ尖形ヲ爲サシムヘシ

次ニ下法ヲ以テ一部ノ模型ヲ作ルヘシ木釘ヲ管ニ挿入シ  
 其孔口ヨリ少シク突出セシメ普通ノ法ニ從ヒ齒根及隣齒  
 ノ印象ヲ取リ「プラスチック」ヲ用ユルヲ可トス而シテ此印象  
 ヨリ模型ヲ作ラハ管ノ大サ及直徑ヲ知ルヘシ然スレハ患  
 者ニ接セスト雖モ人造齒冠ヲ齒根ニ挿入シ結合スル準備  
 ヲナシ得ヘシ小白齒ノ場合ニハ往々二分シタル髓腔ノ一  
 ヲ金ニテ填メ木釘一個ヲ用ヒテ人造齒冠ニ結合スルカ或  
 ハ分裂シタル釘一個又ハ二釘ヲ用フルヲ宜シトス  
 樞軸ヲ製スルニ用フル材料ハ管ノ大サニ依テ之ヲ定メサ  
 ルヘカラス若シ管小ナルトキハ金屬(金又ハ白金)ヲ用フル  
 ヲ最良トスルモ管大ナルトキハ壓縮シタル「ヒコリ」樹  
 ヲ用フルカ又ハ鑷磨シ得ヘキ木ニ金屬針ヲ扭入シタルモノ  
 ヲ撰フヘシ  
 樞軸ニシテ單一ノ金鍊ナルトキハ緊密ニ失セサル様管ニ

適合セシメシカ爲メ鋸子ヲ以テ之ヲ粗而トナシ蠶綿ヲ以テ之ヲ掩ヒ管ノ全ク乾燥シタル後護謨樹脂(ガムコトバル)ノ依的兒溶液或ハ樹脂ノ酒精溶液ヲ以テ右蠶綿ヲ浸シ以テ樞軸齒ヲ固着セシムヘシ復タ木針若クハ木被セル針ヲ用フル場合ニ於テモ其方法ハ右ト同一ナリト雖モ唯其異ナル處ハ前法ノ如ク「セメント」又ハ蠶綿ヲ用フルニ及ハサルニアリ蓋シ針ハ能ク管ニ緊着シテ之ヲ取去ルニハ相當ノ力ヲ要シ且口中ノ濕氣ハ木釘ヲ膨脹セシムルヲ以テ人工齒冠ヲシテ安全ニ其位置ニ固着セシム

渾テ樞軸齒ハ咀嚼スル時ニ相對スル顎ノ齒牙ト接觸セサル様整置セサルヘカラス

### 第十五章 神經痛及神經系統ノ疾病

顔面神經痛ハ一神經ノ刺衝ニモ通常傷害ヲ被ムリ又ハ疾

病ニ罹レル位置ヨリハ遙カニ離隔セル部分ニ於テ疼痛ヲ發スヘシトハ何人モ疑ハサル處ノ事實ニシテ例ヘハ肝臟ノ脈衝シタルカ爲メ右肩ニ疼痛ヲ覺ヘ又膀關節ノ病ニ侵サレタルカ爲メ膝關節ニ疼痛ヲ生シ又齒髓ノ刺衝ヲ受タルカ爲メ頭部及顔面ニ疼痛ヲ感スルカ如キ日常吾人ノ遭遇スル處タリ是等ノ反射的即チ交感的ノ疼痛ヲ稱シテ神經痛ト云フ

復神經痛ハ或一部ニ於テ何タル疾病ヲモ患ヘサルニ起ルコトアリ例セハ虛弱、厥冷、瘴氣若クハ妊娠ノ場合ニ於ケルカ如シ皆是腦若クハ脊髓ノ如キ中樞大神經ノ疾病ニ起因スルモノナリトス又疼痛ヲ覺ヘサル神經ノ疾病障害ニシテ全身健康ノ錯亂ヨリ神經痛ヲ起スコトアリ則チ吾人ハ疼痛ノ少ナキ或ハ全クナキ齶齒ノ患者カ疾病等ノ爲メ身軀ノ勞衰シタル場合ニ於テ往々劇烈ナル神經痛ヲ惹起ス

ルノ適例アルヲ目撃スヘシ  
 神經痛ハ衝クカ如ク燃ユルカ如キ疼痛アルモノニシテ神  
 經分枝ニ波及シ恰モ規律アルカ如ク一日中時ヲ定テ發起  
 シ而シテ一定ノ時間中ハ連續シ終ニ定期ノ時ニ至テ消散  
 ス  
 神經痛ノ病理ハ未タ判然セサルヲ以テ該疾患ノ原因モ亦  
 未タ明瞭ナル能ハス然レトモ前ニ述ヘタル生理上ノ事實  
 ヲ記慮シ齒牙ニ供給スル第五對神經ハ頭部及面部ノ全軀  
 ニ分佈セラル、コトヲ觀省セハ齒牙疾病ノ屢ハ顔面神經  
 痛ヲ起スハ其偶然ニアラサルヲ理解スルコト敢テ難カラ  
 サルヘシ而シテ局所ノ疾病ヨリ起レル神經痛ト身軀組織  
 ノ原因ニ歸着スヘキモノトハ未タ之ヲ區別スル徵候ナキ  
 ヲ以テ疑義ノ存スル凡百ノ場合ニ於テ神經ノ諸疾病ヲ探  
 究スルノ價值如何ハ未タ輕々ニ斷定スヘカラサルナリ

前述セル齒牙ノ諸疾患ハ渾テ皆神經痛ヲ起スニ足ルヘシ  
 ト雖モ齒髓ノ慢性脈衝ヲ以テ最モ普通ノ原因ナリトス而  
 シテ顔面神經痛ノ場合ニ於テハ施術者ハ患者自ラ齒牙ニ  
 傷害ナシト云又ハ齒痛ヲ感セス等ノ言ニ満足セスシテ尙  
 ホ充分ノ注意ヲ施シ齒ヲ精細ニ驗査セサルヘカラス何ト  
 ナレハ患者ハ概テ神經痛ノ原因タル齒牙ノ疾病ハ孰レニ  
 存在スルヤヲ詳知セス且ツ其疼痛ヲ感セサル齒牙ニシテ  
 往々神經痛ノ原因ヲナセルコトアレンハナリ左レハ窩孔ハ  
 單ニ之ヲ一見シタルノミニテ足レリトセス探針又ハ照口  
 鏡ヲ以テ之ヲ精査シ尙ホ齦肉ノ間若クハ其下ニ隠レタル  
 窩孔ヲ驗シテ齒骨疽、培生骨瘤、齦肉脈衝及齒根膜厚化等ノ  
 徵候アルヤ否ヤヲ探究セサルヘカラス骨疽ニ罹リ破壊セ  
 ル智齒(普通神經痛特ニ耳痛ノ原因)ニ於テハ其位置ノ爲ニ  
 神經痛ノ原因タルコトヲ發見シ難シ又神經痛ハ齒槽隆起

線ノ極端ニ生スルコト多ク其上顎ノモノニアリテハ照口  
 鏡ヲ用ヒサレハ之ヲ窺知スル能ハス下顎ノモノニ於テモ  
 頰又ハ眼肉ノ下ニ隠ル、ヨリ之ヲ發見スルコト容易ナラ  
 ス齒牙ノ全ク萌生セサル前ニ當リ腐蝕ノ爲ニ齒冠ノ破壊  
 セルヨリ起ル神經痛ハ探針ヲ以テ該齒ヲ蔽ヘル眼肉ノ小  
 孔ヲ通シテ探クルニアラサレハ其存在ヲ判知スヘカラス  
 此他種々ノ齒牙又ハ顎ニ埋没セル齒牙ノ神經痛原因ナリ  
 ト識認シタル場合ニ於テハ斯ル方法ヲ用フヘシ培生骨瘤  
 カ神經痛ヲ起セル場合ノ如キ殊ニ然リトス  
 縱令神經痛ノ頑固ニシテ治療ヲ施シテ健全ノ状態ニ復ス  
 ル能ハスト認メタルトキト雖モ猥リニ之ヲ拔去スヘカラ  
 ス蓋シ神經痛ハ往々蝕蝕セル窩孔ヲ充填シ以テ齒牙ノ感  
 覺過敏ナル組織ヲ保護シテ刺衝ヲ受ケサラシムルコトヲ  
 得ヘキヲ以テナリ凡テ神經痛ノ療法ハ溫度ノ變化ニ對ス

ル齒牙ノ感覺ヲ増進セシメサルヲ要ス此目的ヲ果サシニ  
 ハ鹽酸化亞鉛「セメント」ヲ用フヘシ又齒髓ノ露出シ或ハ單  
 ニ象牙質ノ薄層ヲ以テ蔽ハル、場合ニ當リテハ前章ニ於  
 テ述ヘタル方法ニ從ヒ此薄層ヲシテ窩中ノ深底ニ存在セ  
 シムヘシ

第五對神經ノ分枝ヲ包擁スル處ノ齒牙ノ外ニ神經痛ヲ惹  
 起スヘキ外科的疾痲アリ此場合ニ當リテハ成ルヘク其神  
 經ノ通過セル通路ノ全般ヲ精査シ神經又ハ其分枝カ痲或  
 ハ麻痺等ノ爲ニ壓セラレ或ハ脈衝、培生骨瘤若クハ神經ノ  
 通過スル骨溝ノ骨疽ニ罹リタルカ爲ニ侵サル、コトナキ  
 ヤ否ヲ調査スヘシ竇粘膜ノ脈衝ハ上顎齒牙ニ分佈スル齒  
 神經ヲ被包シテ以テ神經痛ヲ起スコトアリ曾テローメヤ  
 氏ハ神經分枝中ニ他物ヲ含メルカ爲ニ神經痛ヲ起シタ  
 ル場合アルコトヲ報告セリ又頭部ノ梅毒瘡ハ夜間ニ於テ

神經痛ニ等シキ疼痛ヲ發スルコトアルカ故ニ宜シク此兩者ヲ混淆セサル様注意セサルヘカラス  
 凡テ上述セル病源ヲ發見シ之ヲ除去セントスルハ神經痛ヲ治療スル第一着ノ手段ナリト雖モ亦其素因ノ治療ハ決シテ之ヲ忽諸ニ附スルコトナキヲ要ス前ニ述ヘタル如ク全身ノ狀況ハ少許ノ局處痛若クハ劇烈ナル神經痛ヲ起シタルヤ否ヲ判定スルニ足レリ又之ニ反シ全身ノ狀況ヲシテ健康ニ復セシメハ縱令少許ノ局處痛タル原因ハ尙ホ存在スルトモ以テ其痛苦ヲ屢ハ消滅セシムルコトアリ若シ神經痛ニシテ患者ノ虛脱又ハ「マツリヤ」熱ニ原因スルトキハ幾尼涅ヲ用ヒ其効アルヘシト雖モ尙ホ其藥効ナキトキハ砒石ノ「<sup>ホ</sup>トネル」氏溶液ヲ使用スヘシ總シテ虛脱、痲痺質、斯、梅毒ヨリ起ル神經痛ハ各自其療法ニ應シテ治療ヲ施サルヘカラス

神經痛ノ根源局所部ナルカ中樞部ナルカ將ク體質ナルカヲ發見シ難キ場合ニ於テハ電氣療法ヲ施シテ疼痛アル神經ノ刺激ヲ鎮靜スルノ外ナシ冷却法ヲ以テ一時神經ノ刺激ヲ鎮メシメハ氷又ハ蒸發劑ヲ皮膚ニ施スヘシ雙關菊或ハ勿刺篤里亞ノ軟膏或ハ莖若及嘔囉防謨等モ亦同一ノ効果ヲ奏スルニ足レトス  
 疼痛ヲ感スル部位ト腦トノ間ナル或ル部分ニ於テ神經ヲ分離スルノ手術ハ學理上疾患ニ罹レル神經ト腦トノ通路ヲ防キ以テ其疼痛ヲ消滅スヘキカ如此手術タル殊ニ願神經ノ幹線ニ於テ疼痛アル場合ニ施サル、モノナリト雖モ好結果ヲ得ルコト罕ナリ何トナレハ第一、實際痛部タル神經ヲ知ルコト難ク第二、神經痛ヲ起シタル疾患部ト腦トノ間ナル神經ヲ探リ或ハ之ヲ分別スルコト難クレハナリ好シ之ヲ發見シ得タリトスルモ其深部ニアルカ故ニ到底

之ニ達スルコト易カラサルヘシ  
 神經錯亂……悠遠ナル部位ニ於テ疼痛ヲ惹起スルノ外  
 周圍ニ存在スル神經ノ刺衝ハ反射刺衝ヲ起シ腦或ハ他ノ  
 大神經ヲ錯亂シ以テ病的作用ノ種々ナル變化ヲ結果ス而  
 シテ齒牙ノ疾患ハ神經痛ヨリモ一層重劇ナル神經過害ヲ  
 惹起スルコトナシト雖モ劇甚ナル神經痛ハ屢ハ齒神經ノ  
 刺衝ヨリ起ル類例ハ夥多ニシテ枚舉スルニ遑アラズ反  
 射刺衝ノ運動及交感纖維ニ傳播スルコトハ顔面神經痛ノ  
 劇烈ナル場合ニ於テ面筋ノ拘攣ト共ニ涙液、唾液、粘液及患  
 部ノ皮膚上ニ於テ汗ノ流出ヲ伴フヲ觀テ知ルヘシ  
 エスクイロル氏及アシパーナイ氏ハ智齒ノ發生シ難キヨ  
 リ發狂シタル者アリタル場合ニ於テ其齒ノ上ナル齦肉ヲ  
 截開シタルニ立トコロニ癒ヘタルコトヲ報告シトームス  
 氏ハ培生骨瘤ノ爲ニ癩癩病ヲ誘起シタル二個ノ場合ニ於

テ其齒牙ヲ拔去シタルニヨリ終ニ之ヲ治シ得タルコトヲ  
 報告セリ又患齒ノ爲ニ背脊トナルコト少ナカラス是ニ就  
 キ數多ノ學者ハ説ヲナシテ曰ク是レ五對神經ノ齒牙分枝  
 ニ於ケル刺衝カ睦ヨリ網膜ニ移リ局所充血及脈衝ヲ生シ  
 タルニ由ルト  
 此等ノ疾病ニ就テハ神經痛ニ關シ上述セルモノト同一ノ  
 注意ヲ要セサルヘカラス則チ其疑ハシキ容態ヲナセルト  
 キハ能ク齒ヲ檢シ齒ノ病患ヨリ來ル神經刺衝ノ原因ヲ除  
 キ去ルヘシ

### 第十六章 拔齒術

拔齒術ヲ施スニ方リテハ手術者ハ患者ノ右側ニ立チ其上  
 齒ヲ拔クトキハ患者ノ位置ヲシテ低ク其下齒ヲ拔クトキ  
 ハ高カラシムヘシ而シテ器械ハ右手ニ持チ左手及其指腕

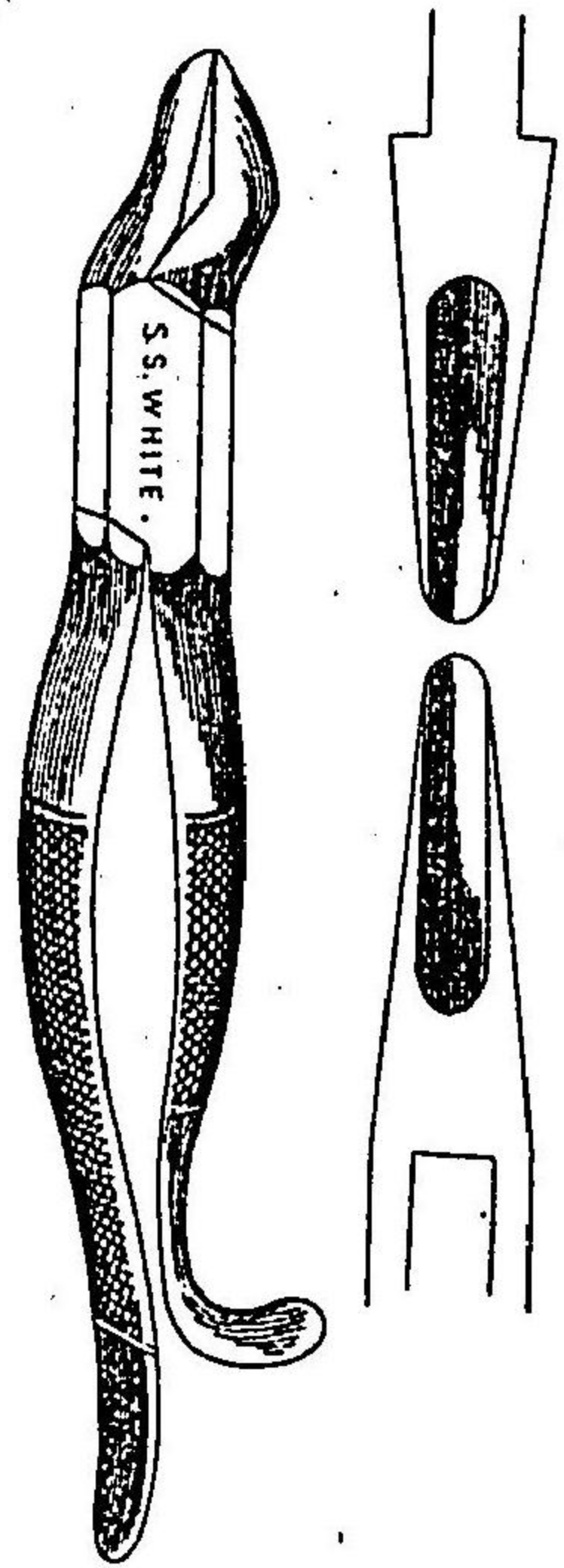
ハ頭ヲ押へ或ハ下顎ヲ支持シ或ハ唇ノ接觸ヲ防キ其他器械ノ使用ヲ助クルノ用ニ供スヘシ

拔牙器械ハ主トシテ鉗子トス其刃ハ齒牙ノ各種類ニ隨ヒ種々ノ形狀ヲ爲シ齒ヲ破壊スルコトナク最モ把持ニ便ナラシメ其端ハ齒頸ト齦肉ノ間ニ插ミ容易ニ齒根部ニ入ルヘキ襟尖端ヲ形成セリ

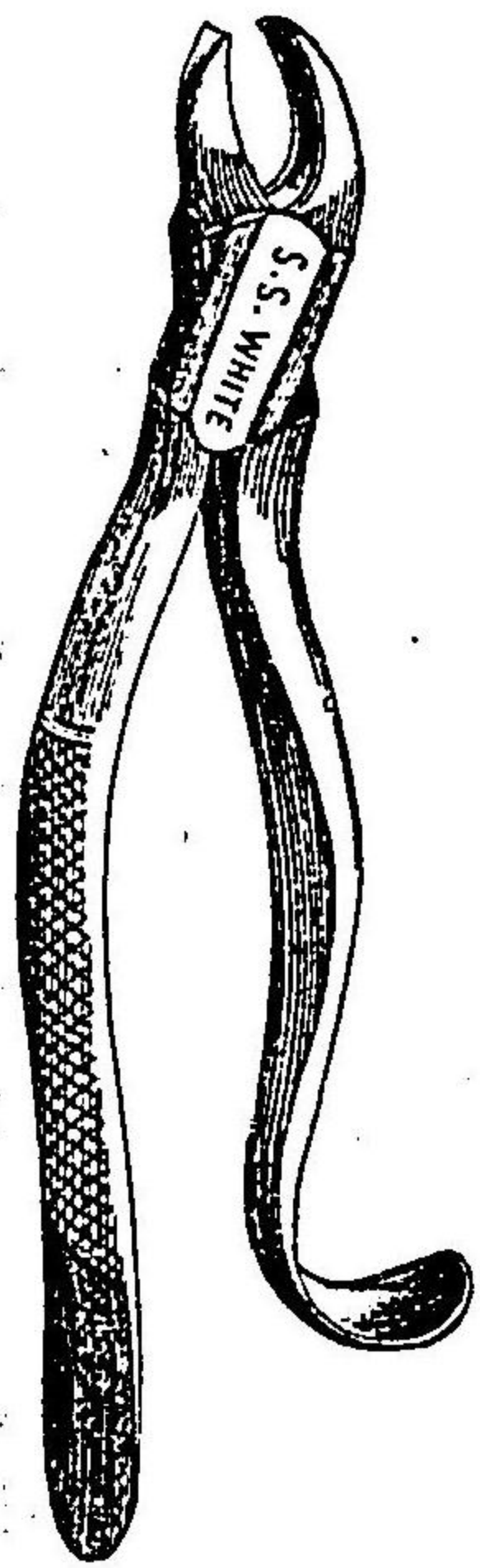
拔牙ノ手術ハ分ツテ二動作トス第一、齒ヲ把持スルコト第二、其接着ヲ緩メ齒槽ヨリ抜キ去ルコト是ナリ

齒ヲ把持スルノ法ハ何レニ於ケルモ相同シ即チ鉗子ヲ輕ク齒頸ニ當テ次ニ強ク齒根ニ沿フテ齒槽ノ端ニ達スルマテ鉗子ノ爪ヲ推進シ齒ヲ破壊セサランコトニ注意シテ柄ヲ握リ第二ノ手術ニ移ルモノトス齒ノ鉗子ニ把持セラル、ヤ否ヤ尙ホ深ク鉗子ヲ挿入シ齒槽中ノ齒ヲ抱キ一層其力ヲ強ムヘシ然レトモ齒冠ヲ破碎セサルコトニ注意スヘ

圖十六第



圖壹十六第





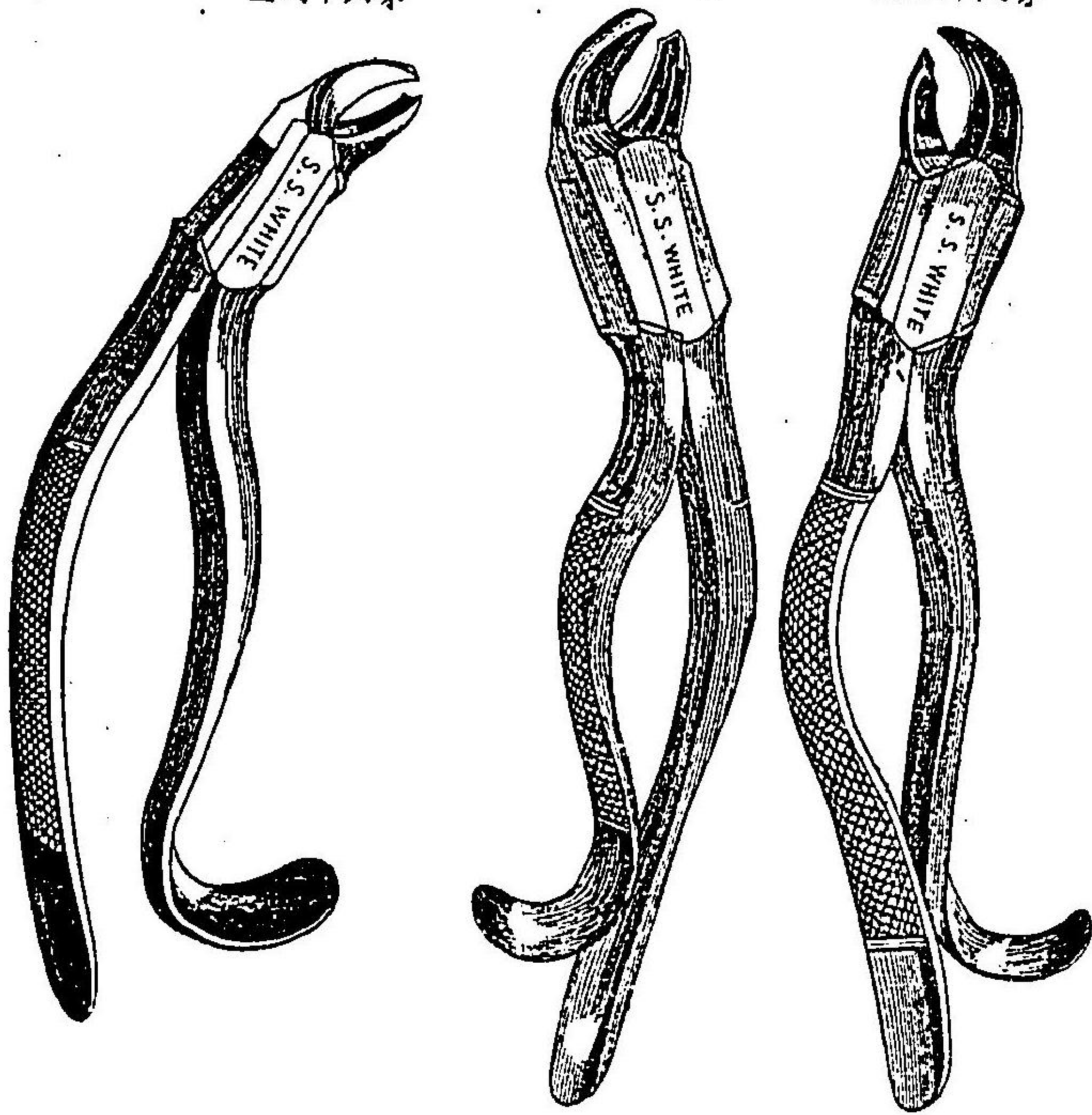
シ或ル學者ハ鉗子ヲ以テ齒ヲ把持スルニ先クチ放血刀ヲ以テ齦肉ヲ分離スルヲ必要ナリトスト雖モ此部ノ接着ハ左程強キモノニアラサルカ故ニ此必要ナク鉗子ノ手段ヲ以テ充分々離スルコトヲ得ヘシ鉗子ヲ握持スル方法ハ第五十八及第五十九圖ニ示スカ如シ  
第二ノ手術ハ齒ノ種類、齒根ノ數、位置、形狀及大サ又ハ圍繞スル顎骨ノ抵抗如何ニ依リ差異アリ而シテ本來第二ノ手術ハ斯ク第一ト區別スレトモ其實、親密ナル關係ヲ有シ其間僅カニ一瞬時ニ過キスシテ熟練セルモノハ速カニ手術ヲ全フスヘシ然レトモ齒ヲ齒槽ヨリ拔除スルニ當リ力ノ應用其宜シキヲ得サルトキハ多ク齒ヲ破碎シ其周圍ニアル顎骨ヲ傷害スルコトアルヲ免レンス  
上顎前齒ヲ拔クニ用フル鉗子ハ第六十圖ニ示スモノナリ此齒ハ圓錐狀ノ齒根ヲ有スルカ故ニ之ヲ拔クニハ先ツ扭

リテ其齒槽ノ接着面ヲ緩メ稍前方ニ之ヲ引クヘシ上顎犬  
 齒ヲ抜クニハ唯上顎前齒ヲ抜去スルニ用フルモノヨリ一  
 層強キ器械ヲ用フヘキノミニシテ其形狀及使用法ニ至テ  
 ハ毫モ之ト差異アルナシ  
 上顎小白齒ニ用フル器械ハ第六十一圖ニ示スモノ是ナリ  
 其形ハ前齒及犬齒ニ用フルモノニ大同小異ナリ其刃ハ稍  
 前者ヨリ狭ク其柄ハ下顎齒ニ觸ルサル爲メ屈曲セリ上顎  
 小白齒ノ根ハ扁平ナルカ故ニ之ヲ捫ルコト能ハス依テ單  
 ニ強ク外方ニ引キ後チ之ヲ緩メテ前後ニ動搖シ斯クシテ  
 後始メテ下方ニ引キテ抜去スヘシ上顎大白齒ヲ抜去スル  
 鉗子ニハ二種アリ一ハ右側ニ用ヒ他ハ左側ニ用フ(第六十  
 二圖及第六十三圖参照)外刃ハ二彎曲ヨリ成ルヲ以テ大白  
 齒ノ外根ヲ保持スルニ便ニシテ内刃ハ内根ヲ鉗取スルニ  
 便ナリ此齒ヲ抜クニハ最初ニ力ヲ外方ニ用フヘシ何トナ

圖二十六第

圖三十六第

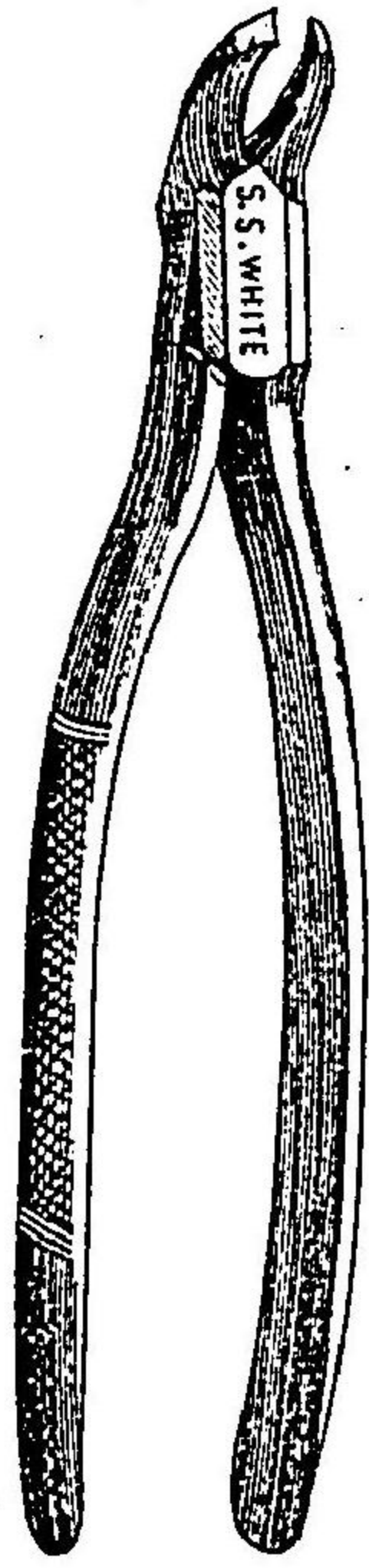
圖四十六第



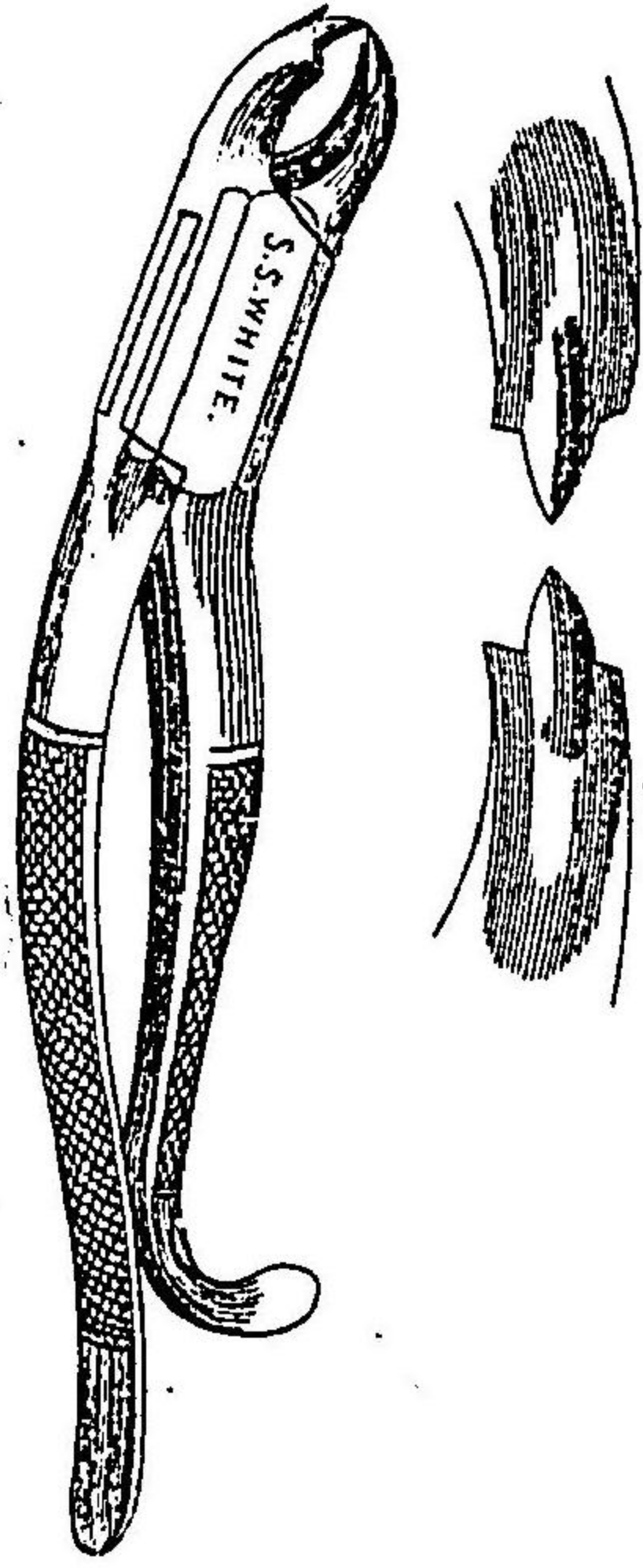
レハ外方ノ齒槽壁ハ内方ノモノヨリ其抵抗甚ク弱ク且ツ  
口蓋面ニアル齒根ノ方向ハ齒牙ヲ内方ニ動搖スルニ當リ  
折斷ノ恐レアルヲ以テナリ斯シテ左右兩側ニ齒根ヲ動搖  
シテ遂ニ下方ニ拔去スヘシ  
上顎智齒ハ上顎大白齒ト同一ノ方法ヲ以テ拔去スヘシト  
雖モ其齒根ハ往々双生シ且ツ其周圍ノ骨ハ方眼格子狀ニ  
シテ柔軟ナルヲ以テ強ク力ヲ要スルコト少ク普通ノ白齒  
鉗子ヲ用フルモ可ナリ然レトモ其端ノ智齒ニ達スヘキ爲  
ニ殊ニ屈曲セルモノヲ便ナリトス  
下顎前齒ノ根ハ側面ニ於テ一層扁平ナルヲ以テ齒根ヲ緩  
メルニハ始メ前方ニ曲ク充分之ヲ前後ニ動搖シ後上方ニ  
拔去スヘシ第六十四圖ニ示セルモノハ此齒ニ用フル鉗子  
ナリ  
下顎犬齒ハ多少圓錐狀ノ根ヲ有スルカ故ニ多少之ヲ扭リ

同シ  
 下顎小白齒ハ其根側面ニ於テ扁平ナルカ故ニ之ヲ抜クニ  
 ハ先ツ初メニ外方ニ押シ後左右兩側ニ動搖シ同時ニ上方  
 ニ拔去スヘシ第六十五圖ハ此齒ニ用ユル鉗子ナリ  
 鉗子ヲ以テ下顎小白齒及大白齒ヲ拔去スルニ方リテハ左  
 手大指ノ端ヲ鉗子ノ關節部ニ置キ他指ヲ以テ下方ヨリ顎  
 ヲ上方ニ壓スヘシ然カスルトキハ鉗子ヲ自由ニ使用シ得  
 ルノミナラス拔去ノ際上顎齒ニ強劇ノ接觸ヲ與フルコト  
 ナク且ツ脱臼ノ危険ヲ防遏スルノ便アリ  
 下顎大白齒ハ初メ外方ニ力ヲ加ヘテ之ヲ緩メ後外方ヨリ  
 内外ニ動搖シ上方ニ拔去スヘシ若シ強キ抵抗アルトキハ  
 前後ニ之ヲ動カシ多少後方ニ曲レル根ヲ分離スルヲ宜シ  
 トス此齒ニ用ユルモノハ第六十六圖ニ示ス鉗子ナリ

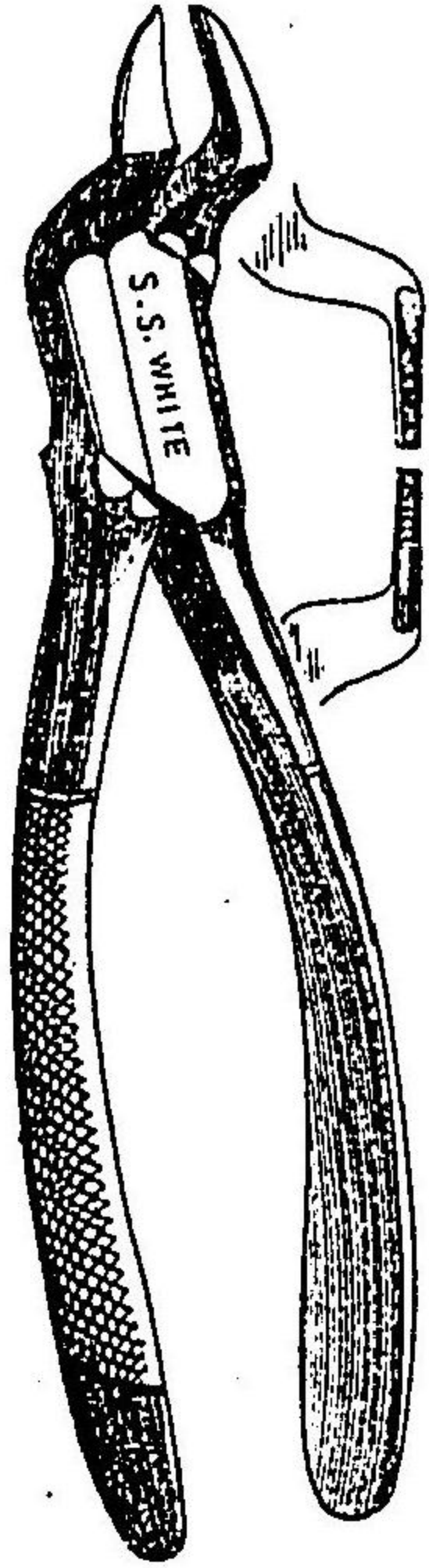
圖五十六第



圖六十六第

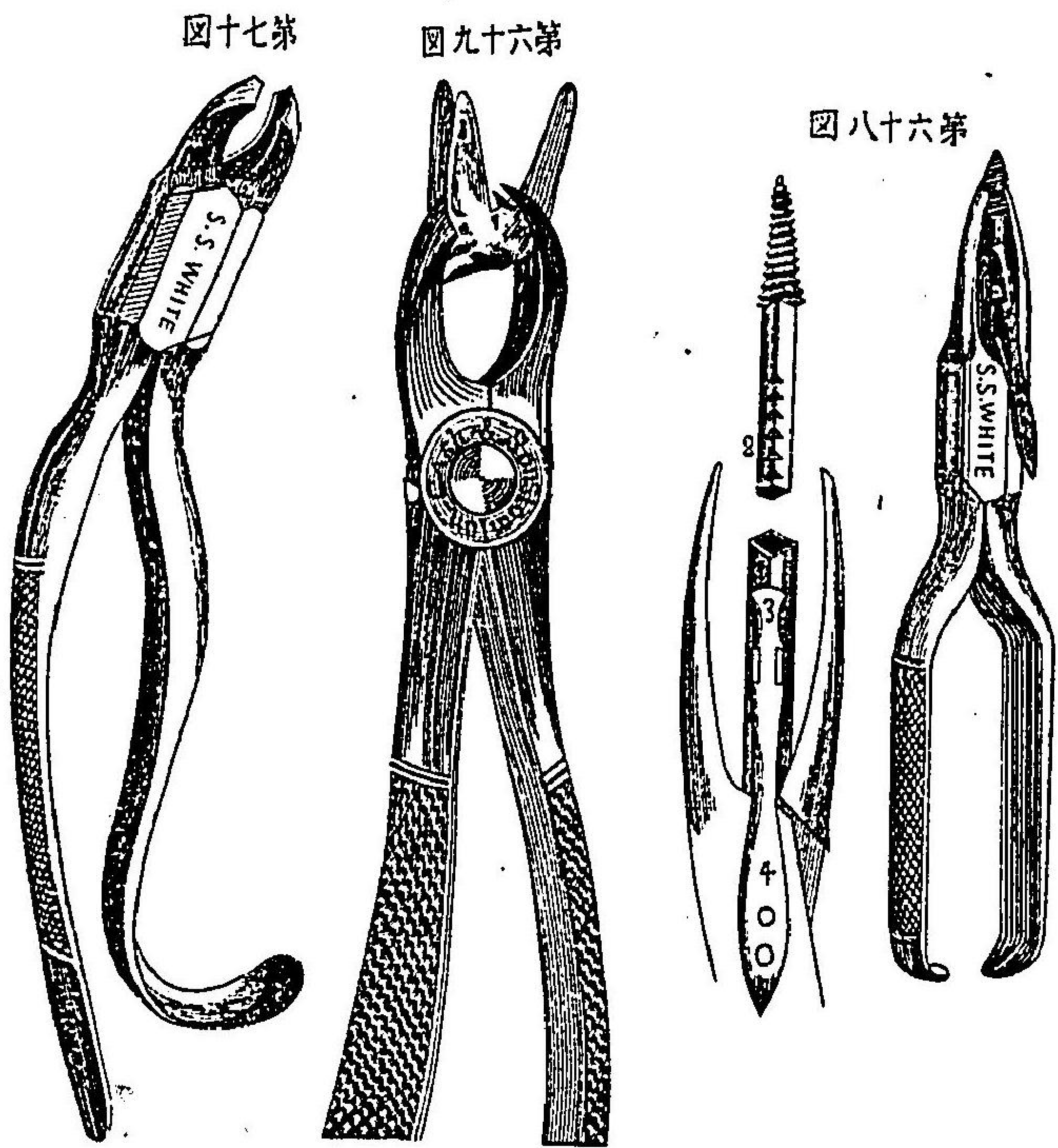


圖七十六第



下顎智齒ハ第一及第二大臼齒ト同法ヲ以テスヘキモ強力  
ヲ要スルユト尠ナリ但其用ニ供スル鉗子ハ容易ク該齒  
ニ適應スヘキ角度ヲ以テ屈曲セル刃ヲ有スルモノヲ撰ハ  
サルヘカラス  
前齒、犬齒及小臼齒ノ如キ上下兩顎ノ單根齒ヲ拔去スルノ  
方法如何ハ既ニ之ヲ論述セリ即チ鉗子ヲ齒根ニ沿フテ推  
進シ充分其健全部ヲ握リ尙一層鉗子ヲ進メ回轉運動ヲ與  
ヘ刃ヲシテ一層速カニ没入セシムヘシ若シ齒根ニシテ齒  
槽中ニ齶蝕シ又ハ破壞セルトキハ前者ヨリ小ナル刃ヲ有  
スルモノ即チ第六十七圖ニ示スカ如キ鉗子ヲ用フヘシ  
第六十八圖ハ上顎前齒齶蝕ノ爲メ大ニ破壞シテ普通ノ鉗  
子ヲ以テスルトキハ破碎スル如キ場合ニ其根ヲ拔クニ用  
フルモノナリ此鉗子ノ刃間ニハ螺旋鑽ヲ備ヘ刃ノ齒槽中  
ニ推進セラル、ニ先チ窩孔ニ鑽入スル裝置ヲ有ス

大臼齒ノ齒根ヲ拔去スルニハ齶蝕ノ度ニ依テ差異アリ齒  
 根若シ強ク結合スルトキニハ前述シタル如キ普通ノ鉗子  
 ヲ以テスヘキモ若シ普通ノ鉗子ニテ鉗取スルコト能ハサ  
 ルトキハ別種ノモノヲ以テス此鉗子ハ長クシテ且ツ尖銳  
 ナル又テ備ヘ以テ齒槽中ニ推進没入セシム而シテ第六十  
 九圖ハ上臼齒第七十圖ハ下臼齒ニ用フヘキ此種ノ鉗子ヲ  
 示ス  
 孰レノ齒牙タルニモセヨ拔牙スルニ當テ如何ナル手段ヲ  
 施スモ到底鉗取シ難キトキハ鉗子ヲ以テ齒槽ノ端又ハ薄  
 キ齒槽壁ヲ齒ト共ニ鉗取シ之ヲ破壞スルコトヲ躊躇スヘ  
 カラス此手術ヲ適當ニ施ストキハ其結果善良ニシテ將來  
 ノ危險ヲ防過スルコトアリ何トナレハ齒槽ノ薄壁ヲ形成  
 スル骨ノ一部分ハ縱令傷害セラル、モ齒根ヲ拔去シタル  
 後ハ吸收ノ爲ニ速ニ之ヲ治スヘケンハナリ



圖十七第

圖九十六第

圖八十六第

大白齒ノ根齶蝕ノ爲メ分離シ又ハ極メテ小部分ニ於テ連  
 續スルカ爲ニ一塊トナシテ之ヲ拔去スルコト能ハサルト  
 キハ徐々ニ齒根鉗子(第六十七圖)ト同形ノモノヲ以テ拔去  
 スヘシ其法深ク鉗子ヲ齒槽中ニ推進シ上顎齒根ハ圓錐形  
 ナルカ故ニ回轉運動ヲ以テ之ヲ緩メ下顎ニアルモノハ其  
 根扁平ナルカ故ニ内方ヨリ外方ニ動搖シ之ヲ拔去スヘシ  
 齒根深ク齒槽中ニ没入シ鉗子之ニ達スルコト能ハサルハ  
 起骨器(エンペーター)ヲ使用ス此器械ハ狭キ刃ヲ有スル鋼  
 軸ト手柄トヲ具有シ其刃ハ薄クシテ内面ニ凹ミ鎗狀ヲナ  
 シ或ハ尖銳ナル水平ノ切縁ヲナス齒科醫ニヨリテハ種々  
 ナル形狀ノモノヲ用フントモ通常第七十一圖及第七十二  
 圖ニ示セルモノヲ以テ凡百ノ用ニ供スルニ足レリトス其  
 用法ハ齒根ニ沿フテ深ク齒槽中ニ突進セシメ以テ齒根ヲ  
 衝キ之ヲ扛起スルニアリ最モ此手術ヲ行フニハ槓杆ノ理

ニヨリ支點ヲ設ケサルヘカヲサルカ故ニ齒槽壁又ハ隣齒  
 ナ以テ支點トスヘシ而シテ起骨器ヨリ生スル力過度ナル  
 トキハ齒槽壁ヲ壞チ又ハ隣齒ヲ轉移セシムルコトアルヲ  
 以テ細心注意スルヲ要ス故ニ指ヲ刃端ニ達スルマテ深ク  
 推進シテ柄ヲ握リ或ル場合ニハ左手ノ大指ト他指トハ其  
 一部又ハ全部ヲ支點トナシ以テ此器ノ方向ヲ正クシ其力  
 ナ加減スヘシ  
 外部齒槽壁ハ甚タ非薄ニシテ起骨器ノ壓力ニ堪ヘサルカ  
 故ニ此壁ト齒根トノ間ニハ起骨器ヲ挿入スヘカヲサルヲ  
 原則トス又上顎智齒ヲ拔去スルニ起骨器ヲ用フヘカラス  
 何トナシハ智齒ヲ圍繞スル骨ハ軟弱ニシテ起骨器ノ壓力  
 ニ遭遇セハ容易ニ破碎スルヲ以テナリ  
 前述シタル所ハ正常ナル齒牙ヲ拔去スルノ法ナリ以下齒  
 根ノ異常ナルヨリ拔牙スルニ困難ナル場合ニ就テ述フル

圖三十七第



圖三十七第



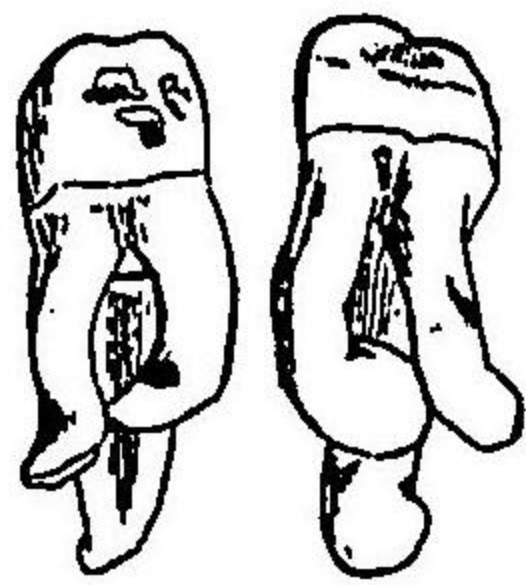
圖二十七第



圖四十七第



圖五十七第



圖六十七第



圖七十七第





所アルヘシ抜齒ヲナスニ當テ齒根屈曲シ又ハ大白齒ノ場  
合ニ於テ齒根ノ擴ガリタルカ爲メ非常ノ力ヲ要スルコト  
アリ或ハ齒根ノ顎中ニアル位置ニ依テ齒根ノ一二ヲ挫折  
シ又ハ齒槽ノ一部ヲ破壞セサレハ拔齒スルコト能ハサル  
コトアリ斯ル場合ニ在テ常ニ破碎セサルヘカヲサル齒槽  
部ハ大白齒ノ齒根間ニ於ケル中隔ナリ下顎大白齒ニ於テ  
ハ殊ニ然リトス此等ノ齒根ニアリテハ其形狀下方ニ於テ  
膨大セルヲ以テ之ヲ被包スル骨板ト分離セシムルコト甚  
ク困難ナリ

渾テ拔齒スルニ當リ非常ノ抵抗力アルトキハ則チ齒根ノ  
異常ナルカ爲ナルヲ察知シ手術者ハ注意シテ其障害ヲ排  
却スヘキ充分ノ手段ヲ用ヒサルヘカラス若シ異常ノ形狀  
如何ナルヤヲ知ル能ハサルトキハ正シキ齒ヲ抜ク方法ヲ  
用ヒ唯一層強キ力ヲ加フヘシ時ニ此注意ヲ施スモ尙ホ齒

根ノ一部齒槽中ニ殘遺スルコトアリ此齒根ハ通常漸次ニ弛緩ヲ來シ齒根鉗子又ハ起骨器ヲ以テ拔去スルコトヲ得ヘシト雖モ此殘遺ニシテ若シ齒根ノ一部ナルトキハ之ヲ引出サントシテ却テ顎骨ニ傷害ヲ來サノヨリモ寧ロ之ヲ放置スルノ優レルニ如カス時トシテハ此殘遺物ノ爲ニ刺劇ヲ惹起スルコトアレトモ其周圍ニアル顎骨ノ變化ハ齒根ヲ弛緩セシムルカ故ニ齒槽突起ノ小部分ト雖モ之ヲ分離スルノ必要少ナシ

第七十三乃至第七十四圖ニ示セルモノハ齒根ノ發生異常ニシテ之ヲ拔去スルニハ異常ノ困難ヲ感スルモノナリ第七十三圖ノ犬齒ハ其屈曲セル根端ヲ齒槽中ニ殘スカ又ハ其周圍ニアル骨ヲ破壞スルニアラサレハ之ヲ拔去スル能ハス第七十四圖ニ於ケル下顎大白齒ハ屢ハ見ル處ニシテ此ノ如キ齒ハ其齒根鳩尾筈(建築學ノ語)狀ヲナシ其端ニ培

生骨瘤ヲ有スルカ故ニ到底之ヲ拔去スルコト能ハス第七十五圖ニ示スモノハ前二者ト同シク上顎大白齒根ノ異常ナルモノニシテ第七十六圖ハ上顎大白齒ノ分岐セル根ノ甚シク擴散セルモノナリ又第十七圖及爰ニ示ス第七十七圖ノ如キ癒合齒ハ之ヲ拔去スル素ヨリ容易ナラサルナリ」

斯ノ如キ大白齒根ノ異常ナルモノニアリテハ好シ之ヲ緩マ其動搖ヲ始メタリト雖モ通常ノ力ヲ以テ之ヲ拔去スル能ハス故ニ此場合ニ於テハ宜シク斷截鉗子ヲ以テ齒根部ヲ分離シ齒槽ニ推進シ得ヘキ刃ヲ有セル鉗子ヲ以テ各別ニ之ヲ拔去スヘシ又大臼齒ノ冠部ハ骨疽ノ爲メ全ク破壞シ齒根部齒頸ニ於テ辛フシテ結着セル場合ニモ亦此施術ヲ爲シ奏効スルコトアリ是等ノ場合ニ於テ若シ同時ニ全塊ヲ除去セントスルトキハ齶蝕セル組織ハ崩壞シ爲ニ齒根ヲ鉗取スルニ極メテ困難ナラシムヘシ然ルト雖モ初ニ

各齒根ヲ分離シ措クトキハ齒根鉗子又ハ起骨器ヲ以テ漸次拔去シ得ルコト容易ナリトス

拔牙術ヨリ生スル偶發傷

サルター氏曾テ曰ヘルアリ拔牙術ヨリ生スル偶發傷ノ何物タルヤテ了解セント欲セハ宜シク拔牙術其モノ、性質如何ヲ研究スルニ勝クハナシ抑モ拔牙術ナルモノハ他ノ外科術ト全ク其性質ヲ異ニシ施術家カ之ヲ行フニ當リテハ大力ヲ用フルカ爲ニ一機關ヲ扭曲シ或ハ全ク之ヲ破壊シ去ルコト往々少ナカラズ其用フル力量ノ果シテ幾磅ナルヤハ今之ヲ詳ニスル能ハスト雖モ其實ニ絶大ニシテ腕及上臂ノ全筋力ヲ擧テ拔牙術ノ施行ニ注クコトアルヤ固ヨリ疑フヘカラス惟フニ大關節ノ脱臼ヲ復舊スル場合ヲ除キテハ拔牙術ノ如ク異大ノ力ヲ要スルモノハ他ニ之アラサルヘシト

是ニ依テ之ヲ觀レハ拔牙術ヲ行フニ當リテハ最モ熟練シ

タル施術家ニテスラ往々患者ヲシテ偶發傷ニ陥ラシムルコトアルヲ推知スルニ足ラン况ンヤ不熟練ナル施術家ノ偶發傷ヲ惹起セシムルノ夥多ナルヤ今更喋々ヲ要セサルナリ

サルター氏カ拔牙術ヨリ生スル偶發傷ノ種類トシテ枚舉シタルモノヲ觀ルニ其數多ハ既ニ説述シ了リタルモノナレトモ今參考ノ爲メ之ヲ列擧シ其未タ陳述セサルモノニ就テ説述スヘシ

- (一) 齒牙ノ碎壞
- (二) 顎ノ碎壞
- (三) 健全齒ノ誤拔
- (四) 一齒ヲ拔去スヘキ場合ニ二齒ノ拔去
- (五) 乳齒ヲ拔去スルニ當リ發育中ナル成齒囊ノ拔去
- (六) 齒齦ノ破傷

(七) 起骨器ノ脱滑ヨリ生スル疵傷  
 (八) 拔去セル齒牙ノ氣道ニ墜落スルコト  
 (九) 拔去セル齒牙ノ咽頭ニ墜落シ及吞下スルコト  
 (十) 下顎神經ノ壓壞  
 (十一) 下顎ノ脱臼  
 (十二) 拔去ヲ目的トセサル齒牙ノ碎壞  
 (十三) 鋸齒狀齒ヲ拔去スルニ當リテ生スル唇ノ切傷  
 (十四) 齒若クハ齒根ヲ上顎竇ヘ壓入スルコト  
 (十五) 顎ニ於ル膿腫窩ヘ齒根ヲ壓入スルコト  
 單一ナル齒槽破壞ノ拔齒ニ伴フコトハ屢ハナリト雖モ重  
 劇ナル破壞ヲ生スルハ極メテ罕ナリ又下顎枝ニ達シ若ク  
 ハ上顎ノ大部ヲ分離スル處ノ破壞ハ曾テ二三拔齒ノ場合  
 ニ於テ生シタルコトアリ此種ノ偶發傷ハ本來骨ノ虛弱ナ  
 ルカ或ハ前章ニ於テ述ヘシカ如ク齒根ノ形成異常ナルヨ

リ生スルモノナリト雖モ多クハ上述セル拔牙術ノ原則ヲ  
 誤用シタルニ歸セスノハアラス然リ而シテ拔牙ヨリ生ス  
 ル顎ノ破壊療法ハ敢テ暴力ノ應用ヨリ生シタルモノト異  
 ナラサレハ今茲ニ之ヲ贅セス  
 復往々健全齒誤抜ノ生スルコトアルハ前章ニ於テ之ヲ略  
 述シタリ總テ齒髓炎ヨリ發起セル疼痛ニシテ神經痛の  
 状態トナリ而シテ其疾患ノ部位ニハ敢テ何タル疼痛ヲ感  
 セサルモ健全ナル隣齒ニ於テ之ヲ感覺スルカ如キ場合ニ  
 當リテハ通常患者ハ其健全ナル齒即チ疼痛ノ原因ニアラ  
 サル齒ヲ拔去セソコトヲ請求シ已マサル者ナルカ故ニ施  
 術家タル者ハ拔牙術ヲ施コスニ先チ須ラク細心注意シ  
 テ疼痛ノ原因タル齒ヲ發見スルニ力ヲ用ヒサルヘカラス  
 又誤抜ハ拔牙器脱滑ノ結果トシテ屢ハ避クヘカラサルモ  
 ノナルヲ以テ若シ器械ノ脱滑シタルトキハ其正位ニ復ス

ルマテ一時施術ヲ停止スヘシ  
 一齒ヲ拔去セントスル場合ニ於テ二個ノ齒ヲ拔去スルカ  
 如キ危険ハ已ニ弛緩シ若クハ本來癒合セル隣齒ニマテ不  
 當ニ力ヲ加フルニ依リ生スルモノナリ  
 曾テ乳臼齒ヲ拔去スルニ當リ其齒根下底ニ存在スル小臼  
 齒ノ基本ヲ共ニ拔去シタルコトアリ蓋シ斯ル場合ニ於テ  
 ル二齒ノ結合ハ已ニ發生セル脈衝作用ノ結果タルニ外ナ  
 ラス  
 往時齒鍵ヲ用フルノ時代ニ在リテハ其通常ノ結果トシテ  
 齒齦ノ破傷ヲ免レサリシト雖モ最近鉗子ヲ用フルニ及  
 テハ亦此危険ニ遭遇スルコトナシ然レトモ齒ノ骨様結合  
 ナ弛緩シ而シテ尙ホ其顎ノ軟組織ニ附着セル場合ニ於テ  
 其齒根カ強靱ナル纖維ノ粘着力ニ依リ附着セラル、コト  
 ナ發見スルコト往々ニシテ尠ナラス是等ノ場合ニ當リ

其齒ヲ拔去スルトキハ必然大ナル齒齦ノ破傷ヲ生スヘキ  
 カ故ニ宜シク切斷刀ヲ以テ其粘着ヲ分離スヘシ  
 下顎大白齒ヲ拔去スルニ當リ其施術ヨリ下齒神經ノ傷害  
 ナ被ムリ爲ニ顔面ノ該大白齒側ニ於テ知覺ヲ喪失スルコ  
 トアリ此種ノ偶發傷ハ該神經カ異常ニ齒根ニ接近セルヨ  
 リ生スト雖モ多クハ時間ヲ經過スルニ隨ヒ快復スヘシ  
 拔牙後ノ疼痛ハ骨膜炎ノ存スルニアラザンハ決シテ重劇  
 ナルモノニアラス而シテ口中ニ蒸溺法ヲ施サハ必ス全治  
 スヘシト、トリス氏曾テ曰ヘルコトアリ拔牙後ノ疼痛ヲ救  
 治セシニハ血塊ヲ除去シ結晶石炭酸及剝篤亞私液各一  
 ナ水一盞ニ溶解シ之ヲ綿毛ニ浸漬シ齒槽中ニ充塞スヘシ  
 ト  
 拔牙後ノ出血——拔牙後ノ出血ハ唯數分時間持續スル  
 ノミ時トシテハ久シク滴漏スルコトアリト雖モ稀ニハ出

血甚シクシテ有力ナル處置ヲ施サ、レハ之ヲ抑止スル能ハサルコトナキニアラス總テ出血ハ患者ノ状態若クハ動脈ノ破傷ニ原因スト雖モ多クハ前者ノ原因ニ依ルテ通常トシ其後者ニ屬スルモノハ至ツテ少ナシ拔牙スルニ當リ通常疵傷ヲ蒙ルヘキ血管ハ齒ノ動脈或ハ異常ニ齒根ニ接近セル其分枝ナリトス然レトモ久シク骨膜炎ニ罹レル者ニ在リテハ其毛細血管ノ微細トナリ殆ント出血スヘカラサルカ如キモノモ拔牙ノ爲ニ膨脹シ非常ニ血液ヲ溢出スルコトアルヲ記憶セサルヘカラス又拔牙後出血ハ一時停止セルモ數時若クハ數日ヲ經テ再發スルコトアリ僅少ノ出血ハ冷却法即チ冷水ヲ以テ口中ヲ含嗽シ或ハ氷ヲ用ヒテ通常抑止スルコトヲ得此法ニシテ効力ナカリセハ麻質枯葉——是等ノ場合ニ於テ有力ナル血液凝結藥——ヨリ成ルル充填物ヲ熱湯ニ軟ハシ空窩ニ充塞スヘシ是

等ノ諸法ヲ施シタルニ拘ハラズ尙ホ血液ノ溢止マズ或ハ其溢出ノ動脈ヨリ生スルモノナルトキハ必スヤ充填物ヲ齒槽窩ニ施サ、ルヘカラス之ヲ爲スニハ冷水ヲ注キテ血塊ヲ除去シ「リント」ノ小片ヲ取リテ齒槽ニ密填シ其底部ニ達スル迄之ヲ層疊スヘシ而シテ「リント」ノ壓定物ヲ其上ニ措キ上下兩顎ノ咬合ニ依リテ之ヲ壓迫シ頭部ヨリ顎ノ下ニ細帶ヲ施シ顎ヲシテ寸毫モ運動セサラシムヘシ但シ充填物ハ時トシテ非常ノ刺激ヲ惹起スルコトアルカ故ニ一二日ヲ經過スル後注意シテ之ヲ除去セサルヘカラス上述セル方法ニ從ヒ齒槽ヲ充填シ出血ノ全面ニ壓迫ヲ持續スルトキハ大概他ノ療法ヲ必要トスルコトアラサルヘシ此方法ニシテ若シ其効ヲ奏セサルコトアルトキハ有力ナル止血藥ヲ貼用シ鐵劑若クハ醋酸鉛及阿片ヲ內服セシメ以テ血液ノ凝固ヲ促カスヘシ最良ノ局所的止血藥ハ過

格魯兒化鐵ニシテ「リント」ノ條片ニ之ヲ浸シ空窩ニ充塞ス  
 ルニアリ然ントモ此藥劑ハ脈衝ヲ誘發スルノ虞ンアルカ  
 故ニ出血ノ重劇ナル場合ニアラザンハ決シテ之ヲ用フヘ  
 カラス尙ホ此療法ニシテ其効果ナキ場合ニ於テハ烙鐵法  
 ヲ施スヘシ然リ而シテ止血最後ノ方法ナル頸動脈結紮法  
 モ其効ヲ奏セス且ツ出血ノ素因アルヨリシテ血液喪失ノ  
 爲ニ患者ノ稀ニ斃死スルコトナキニアラザルヲ以テ施術  
 家タル者ハ拔牙スルニ當リ宜シク注意思慮スル處ナカル  
 ヘカラサルナリ

### 齒科汎論 完

明治二十五年九月六日印刷  
 同年九月七日出版

正價金壹圓五拾錢

編纂所

東京市芝區伊皿子町七十番地

高山齒科醫學院

發行者

東京市芝區伊皿子町七十五番地

高山紀齋

印刷人

同 市京橋區西紺屋町廿六七番地

大久保銈次郎

印刷所

同 市京橋區西紺屋町廿六七番地

秀英舍

發賣所

同 市日本橋區馬喰町

島村利助



金

## ●高山齒科醫學院廣告

本院ハ齒科ニ關スル學術全班ヲ教授スル處ニシテ修業年限ヲ二ケ年トス●教授法ハ學生ヲシテ講師ノ講義ヲ筆記セシメ或ハ教科書ニ由リ懇切ニ授業ス●男女ヲ問ハス何時ニテモ當分ノ内無試験ニテ入學スルヲ得●入學料金貳圓授業料金壹圓五拾錢●院内ニハ寄宿舎ヲ設ケ學生ノ寄宿スルヲ許ス●詳細ノ規則書ヲ望マハ郵券貳錢ヲ送ルヘシ

東京市芝區伊皿子町七十番地

高山齒科醫學院

明治二十五年九月



●高山齒科講義錄廣告

高山齒科醫學院講義錄

第貳拾三號  
八月二十八日出版

我か講義録は齒科有志者をして齒科學研究の資料を得せしめんか爲め去る廿三年十月より二ヶ年完成の目的を以て毎月一回發刊し當九月發刊の第二十四號を以て愈よ其全科を終結せしめんとす今其掲載科目中已に講義の完結せるもの、總目次を擧げ以て之を講讀せんと欲する者に便すると左の如し

齒科器械學「セルロイド篇」

總論●義齒排列法●「プラスチック」ニテ被蓋スル法●模型ニ「セルロイド」床ヲ挿入スル法●「グリスリン」用機械ニ依ル「セルロイド」床●冷法及轉位法●訓戒●修理法●研磨法●其他ノ注意●「セルロイド」床ヲ製作スルニ就テノ原則

齒科一斑

●解剖組織●齒牙ノ發育●顎ノ發育及乳齒成齒ノ發生●齒ノ惡形及齒列不正●齒牙腐蝕●齒牙腐蝕ノ療法(預防法●腐蝕ノ利)●齒髓ノ暴露——齒髓ノ疾病(齒髓炎●齒髓膿●齒髓根骨膜炎●顎骨々膜炎及顎骨々疽●齒牙培生骨瘤●齒骨疽●成齒根ノ吸收●齒槽ノ吸收●眼肉及口内粘膜炎●疾病(眼肉瘻●齒槽膿●口瘡●阿弗答性)●齒牙消耗——器械的剝脫

●唾石即チ齒石●齒牙ニ隨伴スル病的發生(「オドントリムス」●顎)●空齶ノ疾病(空齶瘻)●繼齒法●神經痛及神經系統ノ疾病(顔面神經痛)●拔牙法

齒科學術沿革史

緒言●米國齒科ノ開祖略傳●器械的沿革(人造齒●磁製齒●義齒床●義齒ノ裝結法)●治術的沿革(「單一ナル金屬充填」●化合物充填材料●「迷離藥」●拔牙及植齒●齒科ニ關スル器械及材料)●腔内ノ須要ナル疾病、傷害及自然的缺欠ノ療法

齒科器械學

義齒ニ關スル口内ノ準備●探型法●火力使用法(吹火管●鑲石)●石膏及金屬ヲ以テ模型ヲ鑄造スル方法(石膏模型●金屬模型)●齒科器械ニ應用スヘキ金屬(金●銀)●總義齒及一部ノ義齒ニ使用スヘキ金床ノ製造●器械的齒科醫術ニ使用スヘキ諸種ノ磁製齒●繼齒法●磁製齒牙ノ選擇及調製法●「ヴォルキヤナイト」床●口ノ醜貌ヲ治スルノ法ヲ論ス●人造義齒製作ニ要スル許多ノ金板製造ノ處法●黃金細工用銀●銀鍍●黃銅鍍●軟鍍(「名」)●「ローズ」氏易鎔的金屬●「ラビット」氏金屬●日耳曼銀●字金(「活字金」)●金位ヲ高低シ又合金ノ「キヤラット」ヲ定ムル法●管ヲ附スル床ニ連續シタル木圓筒ヲ以テ一部義齒ヲ支持スル博士「ハンター」氏ノ方法●彈力質護膜製法●義齒床ヲ口蓋ニ吸着セシムルノ方法●「ヴォルキヤナイト」補修法●「ヴォルキヤナイト」ケ「ス」ヲ初形ニ修覆スルノ方法●「スピラル」スプリング(螺旋輪)●螺旋輪ノ爲メ生スル類粘膜障害ヲ阻礙スル法

齒牙比較解剖學

人類ノ齒牙ヲ論ス ● 齒牙ノ形狀 ● 顎骨總論(上顎骨論) ● 齒牙組織論(珐瑯質ヲ論ス ● 象牙質ヲ論ス ● 齒髓質ヲ論ス ● 齒槽膜ヲ論ス) ● 齒牙發育論(珐瑯質機關 ● 象牙質機關 ● 自聖質機關 ● 珐瑯質ノ化學作用 ● 象牙質ノ化學作用 ● 自聖質ノ化學作用 ● フレックナルメチン膜) ● 顎ノ發育、齒牙ノ萌生及結着(生● 齒牙ノ結着)

仍て殘存**現在の科目**は「齒科應用化學」「齒科生理及外科學」「齒科藥物學」  
 する處の**齒科病理學**及び「齒科器械一覽」の四科目なれども  
 是等の科目は來る九月發刊第二十四號迄に替つて之を完結せしむべし

**規則摘要** 講義録ハ一冊ノ紙數百五拾頁内外ヨリ取揃ヘ送本スヘシ ● 但價議  
 ナナシ答案ヲ附スルノ權利ヲ得ント欲セハ東條金五拾錢ヲ仕拂フテ要ス ● 津テ金員  
 ハ東京市芝區伊皿子町七十番地高山齒科醫學院宛ニテ内國通運會社金錢送達便ニ托  
 スルカ又ハ東京市芝三田郵便局掛渡ノ爲替券ヲ以テ送付アルヘシ ● 尙詳細ノ規則ヲ  
 知ラント欲セハ貳錢郵券送付アリ次第規則書ヲ呈スヘシ

東京市芝區伊皿子町七十番地

明治二十五年九月 高山齒科醫學院編輯部

● 高山齒科醫學院編纂書籍廣告

第五對神經解剖篇

全貳册 正價金壹圓

第五對神經解剖篇附錄

全國無遞送料

第五對神經ノ齒牙ニ於ル豈啻ニ輔車唇齒ノ關係ノミナランヤ夫ノ齒牙疾病ノ第五對神經ニ影響ヲ及ホスト多キヲ見ルモ其一斑ヲ知ルヘシ故ニ尙モ齒科醫ヲ以テ競爭場裡ニ馳駢セント欲スル者ノ第五對神經ノ組織如何ヲ知悉セサル可カラサルヤ今更嗽々ヲ俟タサルナリ仍テ本院ハ授業ノ餘暇意其編纂ニ從事シ稿成リ本院講師醫學士土屋、遠山兩先生密ニ訂正シテ出版セリ此書ハ啻ニ文章平易ニシテ了解シ易キノミナラス我邦未曾有ノ鮮明ナル石版圖ヲ以テ説明ニ便シタルハ初學者ニテモ一讀ノ下立

齒科手術論

全一册正價金壹圓 五拾錢遞送料拾錢

齒科ノ學科タル固是實際的ノ一科ナルヲ以テ學理ノ研究ト應用ノ熟練トハ宜シク相  
待テ進歩セサルヘカラス仍テ本院ハ授業ノ餘銳意ニ編纂ニ從事シ今ヤ梓成リ出版  
ス洋裝美麗ニシテ紙數二百十餘頁精圖百二十餘ヲ插ミ以テ理解ニ便ス本書ハ章ヲ分  
ツ二十、節ヲ挿ムコト十一、第一ニ齒牙ノ組織ヨリ標本調製法ヲ説キ進ンテ齒列  
正、腐蝕豫防、防濕謨誤使用法、防濕謨誤用鐵鈕、各充填材調製論、充填用能及用法、咀  
嚼面唇面及頰面空窩ノ充填法、磁製塊充填法、齒ノ隣接面充填法、齒ノ外圍補修ニ係  
ル準備、外圍補修及腐蝕延豫防法、充填術ニ關スル原則大要、脆弱ナル珐瑯質ヲ金  
ニテ被覆補修スル法、齒根ニ人工齒冠ヲ附著スル法、齒根ナキモノニ齒冠ヲ附著スル  
ノ法、齒髓脈術及枯死論、齒髓腔ノ充填法、膿腫治療法、齒根骨膜炎ノ治法等ニ及ヒ亦  
餘蘊アルナシ其本書價値ノ如何ニ至リテハ世既ニ定論アリ今左ニ都下二三新紙ノ批  
評ヲ掲ケテ自贊ニ代フ

東京醫學新誌——先ツ初メハ齒牙ノ組織ヨリ治療材料ノ調製法、器械ノ用法、手術式  
等ニ論及シ且ツ多數ノ密書ヲ挿入ス蓋シ齒科醫學ニハ頗ル有益ナルヘシ  
時事新報——齒科手術論ハ齒科ヲ以テ知ラシムル高山紀齋氏ノ編纂ニ係リ其名ノ如  
ク齒科ニ關スル手術ヲ丁寧ニ述ヘタルモノニシテ一々緻密ナル書ヲ挿ミアリ斯學  
ニ志アル仁ニハ適當ノ教科書ナルヘシ  
讀賣新聞——高山紀齋氏ノ齒科醫學院課程講述ノ筆記ニシテ齒科醫學ニ就テ學說ト  
治術ト併新ナル所説ヲ論述シタル書ナリ今ヤ此種ノ書籍少ナクハ世ニ益スルコ  
ト多カルヘシ  
朝野新聞——標裝美麗印刷鮮明、以テ百年ノ手澤ニ堪ユヘシ目次ハ云々(中略)蓋シ  
手術ヲ論シテ遺憾ナキモノ專門家ノ一讀參考トスヘキ所ナルヘシ  
郵便報知新聞——紀齋氏ノ齒科ニ於ケル其名世間ニ洽チシ氏課テ諸生ニ授クルノ餘

暇ヲ以テ歐米大家ノ說ト斟酌シ遂ニ此篇ヲ著シテ後學ニ與ヘテリ說ク所周到丁寧  
齒科ニ志セル士ハ之ヲ讀ンテ啓發スル所必ス多カラム

東京日々新聞——(前寄)紀齋氏ハ方今此學ノ大家ヲ以テ嗚ル者醇々學理技術ヲ説ク  
詳且密殆ト遺憾ナシ特ニ齒牙保存ヲ主眼トナシ庸醫ノ膽ヲ破ルニ至リテハ拍手喝  
采セサルヲ得サルナリ

國民之友——東京ニ在テ一否テ日本ニ在テ一齒科專門ノ醫學院ヲ以テ開ヘタル高山  
紀齋氏ハ齒科ニ關スル著述ヲ以テ徧ク斯道ノタメニ盡サントス是レ其一ナリ想フ  
ニ只此事ヲ述ヘハ本書ノ批評ハ足ルヘシ其細評ハ專門家ニ讓ル

齒科研究會月報——我社會ニ最モ欠乏テ感シ開業修業兩者トモ之ヲ渴望シテ止マサ  
ルモノハ齒科書ナリ頃者高山齒科醫學院ヨリ題號ノ如キ書出版セリ紙數二百有餘  
ページ圖百十餘種書中ノ記事未タ一讀セサルヲ以テ妄評スルヲ得サルモ術者ノ爲  
メ殊ニ官府ノ試験ニ應スル者ニ裨益ヲ與フル少カラザラン歟 (以下略ス)

# 齒科汎論

既刊  
全壹冊

15/12/36

# 齒科冶金學

全近 壹刊 冊

# 實用齒科器械學

全近 壹刊 冊

# 齒科藥物全書

全近 壹刊 冊

# 齒科病理大全

全近 一刊 冊

八

●●● 陸軍大將大勳位彰仁親王殿下御題字  
 ●●● 前內閣總理大臣從二位勳一等山縣伯爵題辭  
 ●●● 中央衛生會會長從四位勳三等長與貴族院議員叙文  
 ●●● 宮內省御用掛醫學博士醫學試驗委員  
 ●●● 第三回內務省勸業博覽會審判官  
 ●●● 大日本齒科衛生會醫學博士審判委員  
 ●●● 高山齒科衛生會院長  
 ●●● 從六位高山紀齋先生著

## 衛生保齒問答

全一冊 紙數二百頁 郵稅假金四拾錢

本書ハ齒科ノ泰斗高山紀齋先生ガ疑ニ大日本衛生會々員其他諸家ノ質疑ニ對シ歐米諸博士ノ學說ヲ參考シ且多年ノ實驗ニ照シ衛生上齒牙全般ノ關係ヲ問答ニ對シ米齒ノ害毒ニシテ目次ノ概テ小兒ノ齒病○喫烟ノ齒ニ關スル關係○滯齒ノ新著○齒磨粉ノ利害○齒痛ト子宮病及ヒ入齒ノ金充填等外○齒病ト砂糖ノ關係○滯齒ノ失脱シテ肺臟ニ害アリ○齒痛ト子宮病及ヒ入齒ノ金充填等外○齒病ト砂糖ノ關係○滯齒ノ生理ヲ示シテ右通暢用カサレニ眞書ナリ乞フ一讀アル

陸軍大將大勳位彰仁親王殿下御題字  
 前內閣總理大臣從二位勳一等山縣伯爵題辭  
 中央衛生會會長從四位勳三等長與貴族院議員叙文  
 宮內省御用掛醫學博士醫學試驗委員  
 第三回內務省勸業博覽會審判官  
 大日本齒科衛生會醫學博士審判委員  
 高山齒科衛生會院長  
 從六位高山紀齋先生著

衛生保齒問答 全一冊 紙數二百頁 郵稅假金四拾錢

本書ハ齒科ノ泰斗高山紀齋先生ガ疑ニ大日本衛生會々員其他諸家ノ質疑ニ對シ歐米諸博士ノ學說ヲ參考シ且多年ノ實驗ニ照シ衛生上齒牙全般ノ關係ヲ問答ニ對シ米齒ノ害毒ニシテ目次ノ概テ小兒ノ齒病○喫烟ノ齒ニ關スル關係○滯齒ノ新著○齒磨粉ノ利害○齒痛ト子宮病及ヒ入齒ノ金充填等外○齒病ト砂糖ノ關係○滯齒ノ生理ヲ示シテ右通暢用カサレニ眞書ナリ乞フ一讀アル

陸軍大將大勳位彰仁親王殿下御題字  
 前內閣總理大臣從二位勳一等山縣伯爵題辭  
 中央衛生會會長從四位勳三等長與貴族院議員叙文  
 宮內省御用掛醫學博士醫學試驗委員  
 第三回內務省勸業博覽會審判官  
 大日本齒科衛生會醫學博士審判委員  
 高山齒科衛生會院長  
 從六位高山紀齋先生著

九

5F18

○齒科藥物摘要 完一冊 郵税金三拾錢

本邦未タ齒科應用ノ藥物ヲ載スル好書アラズ官府ノ試驗ニ應スルニモ其針路ヲ得ス  
往々ニ望洋ノ歎ヲ懷クト聞ク因テ今般先生ニ請ヒ得テ本書ヲ出版セリ密ニ後進學者  
ノ指南車タルノミナラス一般内外科ニ在リテ齒痛患者及ヒ口腔諸病ニ對スル療法ノ  
便益ヲ得ヘキナリ乞フ普ク購讀セラシムコトヲ

○通俗齒の養生法 完 金五錢

此書ハ高山先生嘗テ東京華族女學校ニ開キシ大日本婦人衛生會ニ於テ演述セラシタ  
ルモノヲ和田忠先生ニ筆記ヲ乞ヒ世ニ公ニス齒ノ養生法ヲ簡易ニ説明セラシテ殊ニ齒  
ノ衛生上世人ノ誤解多キ點ヲ辨論セラシタリ故ニ何人モ齒牙衛生ノ真理ヲ會得スル  
ニ足ル珍書ナリ

○齒の養生 金五錢

右ハ其名ノ如ク平易ニ齒牙ノ養生法ヲ説述シタルモノナシハ何人ニテモ之ヲ一讀ス  
ルルハ必スヤ我邦俗ノ齒牙ノコニ疎漫ナルヲ喫驚スルナルヘシ衛生ヲ重ニスルノ  
士、方ニ一讀ヲ缺クヘカラス

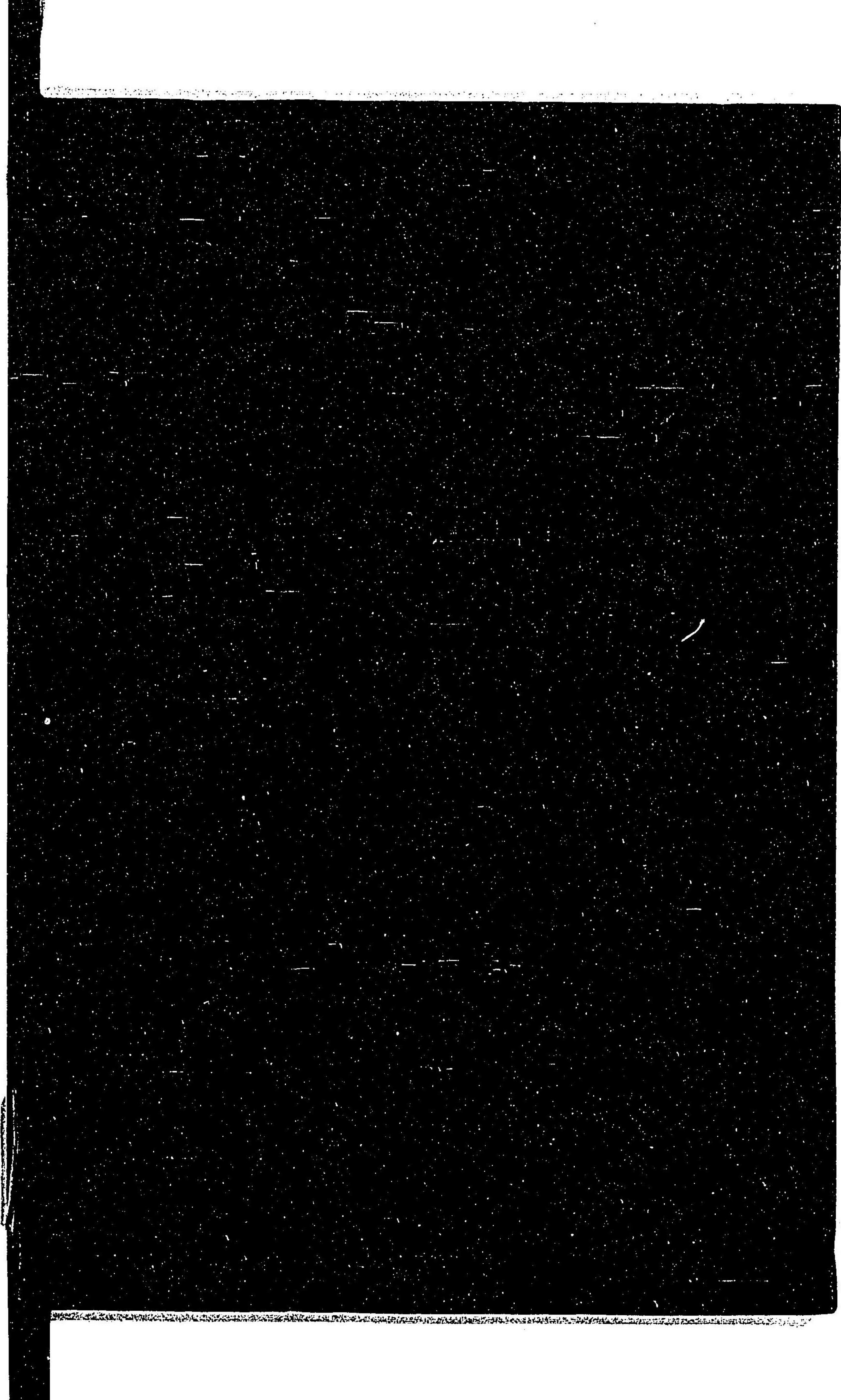
○齒組織及齦肉齒槽圖解 金三拾五錢

此圖解ハ高山齒科醫學院ノ編纂ニ係リ一目ノ下、齒牙ノ組織、微菌繁殖ノ模様ヲ知悉  
スルニ便利ナリ

發賣書舖

東京馬喰町 島村利助  
神田鍛冶町 朝香屋書店  
東京本町 瑞穂屋卯三郎

43-110



43  
110

060210-000-0

43-110

齒科汎論

高山齒科医学院

M25

CBL-0042





